

令和元年度 厚生労働省 介護のしごとと魅力発信等事業 ターゲット別魅力発信事業（若年層向け）実施報告書

令和2年4月30日（木）

一般社団法人 FACE to FUKUSHI

I 若年層向け魅力発信事業について	・・・ P2
II 各事業別の取り組み内容	・・・ P8
1 非福祉系大学生向け出会い創出事業	・・・ P8
2 福祉・介護BOOK制作出版事業	・・・ P19
3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業	・・・ P30
4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業	・・・ P44
5 アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業	・・・ P60
III 全体総括	・・・ P68

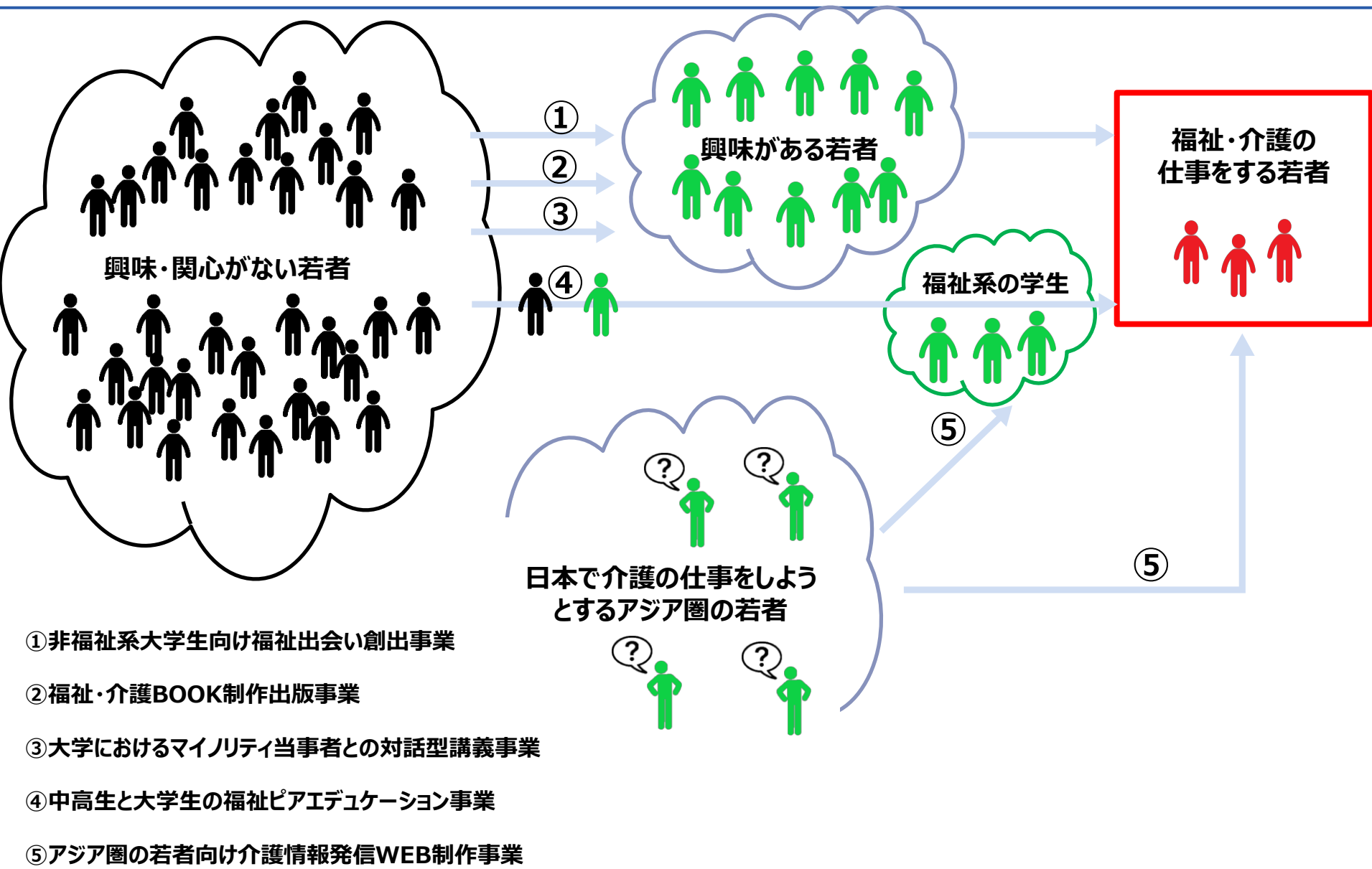
I 若年層向け魅力発信事業について

II 各事業別の取り組み内容

- 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業
- 2 福祉・介護BOOK制作出版事業
- 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業
- 4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業
- 5 アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業

III 全体総括

事業の全体像



I 若年層向け魅力発信事業について

事業概要

- ✓ 実際に福祉・介護事業を実施している団体としての強みを活かし、「若者が福祉・介護のリアルを知る」「若者が福祉・介護職に面白みを感じる」ことを目的として5つの事業を展開した。

①非福祉系大学生向け 福祉出会い創出事業

非福祉系大学生への魅力発信

「福祉系大学以外の大学生」に対し、福祉の可能性を認知する機会を提供し、福祉・介護領域の業界でも自らの関心領域に取り組める可能性を認知してもらう。

②福祉・介護BOOK制作出版事業

若者向け雑誌による介護職の魅力発信

ネット記事のような一過性ではないコンテンツをつくるため、①福祉介護BOOKの制作
②学生を取り巻く介護論考集の制作という2つの出版物を制作する。

③大学におけるマイノリティ当事者 との対話型講座事業

対話によるマイノリティへの理解促進

マイノリティ当事者が、大学に直接赴き、学生と対話型の講義をすることで、マイノリティへの理解や、福祉の仕事の重要性を、身を持って感じられる機会を作る。

④中高生と大学生の福祉 ピアエデュケーション事業

大学生等による中高生への介護授業

福祉の専門家や困り事を抱える当事者、大学での魅力的な教育カリキュラムを経た大学生がストーリーテラーとして中高生への福祉教育を行う。

⑤アジア圏の若者向け 介護情報発信WEB制作事業

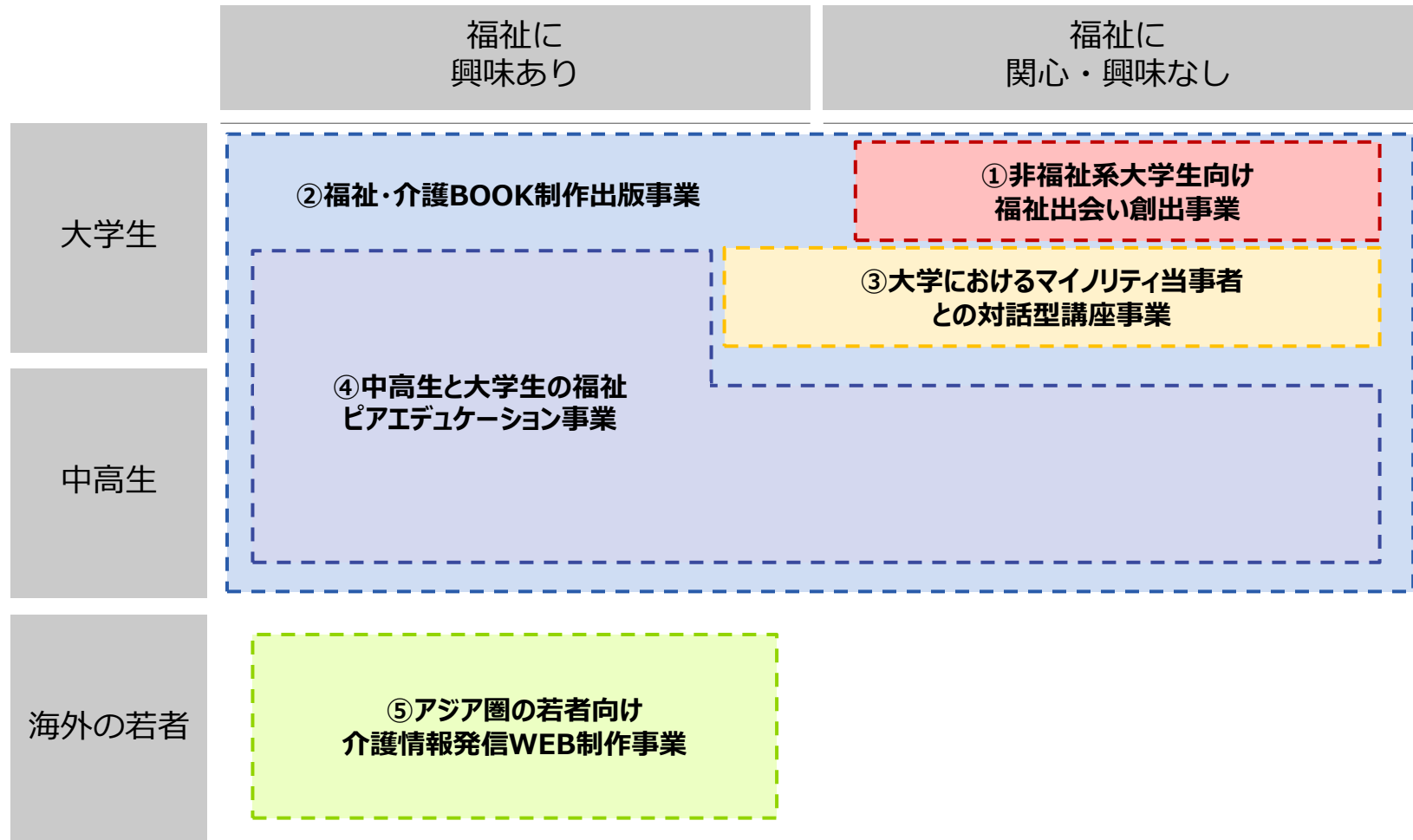
アジア圏の若者へのWEB媒体での広報

EPAや外国人技能実習生制度などを利用して日本で介護の仕事をしようとするアジア圏の若者向けに日本の介護情報を発信する多言語のWEBサイトを制作する。

I 若年層向け魅力発信事業について

各事業の主要ターゲット

- ✓ 5つの事業では、それぞれ以下の通り主要ターゲットを設定し、福祉・介護の魅力発信に努めている。



I 若年層向け魅力発信事業について

各事業の取り組み工程

実施事項	5月～8月	9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月	
		上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬
①非福祉系大学生向け福祉出会い創出事業	企画構想								福祉法人向け勉強会		イベントリリース 集客活動	学生向け トークイベント	WEBサイトリリース グループインタビュー		
②福祉・介護BOOK制作出版事業	企画構想											POPEYE 掲載		出版記念 イベント 論考集 小冊子完成	
③大学におけるマイノリティ当事者との対話型講座事業	企画構想			東京大学でのゼミ実施（全7回）		京都大学でのゼミ実施（全8回）		東京工業大学でのゼミ実施（全7回）		早稲田大学でのゼミ実施（全10回）					
④中高生と大学生の福祉ピアエデュケーション事業	企画構想			講師向け事前研修				旭川龍谷高校（全3回）		旭川東高校	大正中学校		登別明日中等学校		
⑤アジア圏の若者向け介護情報発信WEB制作事業	企画構想							海外視察							WEBサイト リリース
企画委員会の開催								企画検討会議							企画検討会議
事業進捗の検討会議	企画構想		検討会議	検討会議		検討会議				検討会議		検討会議			検討会議

I 若年層向け魅力発信事業について

企画委員会の業務執行体系図

- ✓ 本事業の業務遂行にあたっては、以下の執行体系図に基づき実施した。
- ✓ 企画委員会は10月29日、3月31日に開催した。また、各事業において、個別に企画委員からの助言をいただきながら、事業遂行を行った。



I 若年層向け魅力発信事業について

II 各事業別の取り組み内容

- 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業
- 2 福祉・介護BOOK制作出版事業
- 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業
- 4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業
- 5 アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業

III 全体総括

事業の全体像

●事業の目的

- 非福祉系大学生が、福祉領域の仕事に対する関心を高め、福祉業界を就職選択肢の一つとする。非福祉系大学生とは福祉系大学以外大学生を指し、社会課題や地域貢献に関心を持つ学生は福祉領域と相関性が高いが、福祉を学ぶ機会がないと考え、当事業の主対象とした。
- 福祉法人が、非福祉系大学生を採用するメリットを理解する。採用・定着するには受け入れ側にも課題があり、魅力発信や環境整備が必要だと感じてもらおう。

●実施内容

- 非福祉系大学生向けトークイベント「SOCIAL WORKERS TALK」を開催した（2月14日@東京、2月15日@京都）。
- 社会福祉の魅力と出会うWEBサイト「SOCIAL WORKERS LAB」をリリースした（2月14日リリース）。
- 福祉法人向け勉強会を開催し、非福祉系大学生受け入れ側の課題を意見交換した（12月13日@東京）。
- 上記の3つの活動を「SOCIAL WORKERS LAB」の実験的取組とし、WEBサイトやSNSを通じて、情報発信を行った。

●効果測定の方法

● 学生向けトークイベント「SOCIAL WORKERS TALK」

対象：非福祉系大学生を中心としたイベント参加者

内容：イベント自体の満足度・福祉に対するイメージ・就職の選択肢等

手法：紙面によるアンケートでの回収、口頭でのインタビュー

● 福祉法人向け勉強会

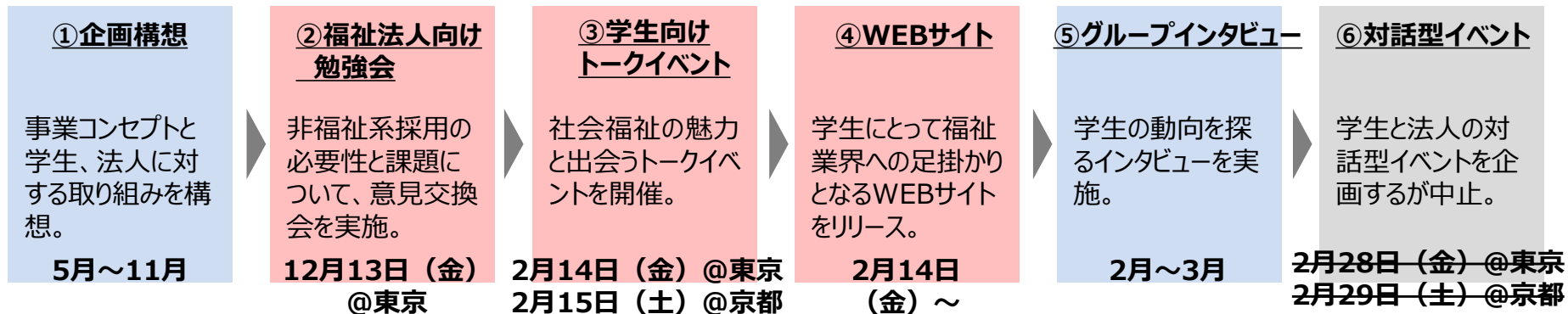
対象：非福祉系大学生の採用を希望している福祉法人（主に人事担当者）

内容：福祉法人が非福祉系大学生を受け入れるために乗り越えるべき課題の整理

手法：意見交換会での意見抽出

事業概要図

- ✓ 本業務は以下の工程で実施した。



- ✓ ①「SOCIAL WORKERS LAB」という事業コンセプトを企画した。「SOCIAL WORKER」は、狭義では社会福祉士を指す福祉の言葉であるが、非福祉系大学生の認知度は低い。一方で社会課題や地域貢献に関心の高い学生にとって「SOCIAL」という言葉はなじみのある言葉である。人口減少時代に、これからの社会をつくろうとする者を「SOCIAL WORKER」と定義し、まずは興味・関心を持ってもらい、そこから福祉を認知してもらおう狙いで名付けた。
- ✓ ②福祉法人向け勉強会では、9法人が参加した。勉強会前半では、事業コンセプト「SOCIAL WORKERS LAB」の共有、後半では、非福祉系大学生を採用する必要性や受け入れ側の課題について意見交換を行った。
- ✓ ③イベントページPeatixでの集客に加え、「大学におけるマイリティ当事者との対話型講義事業」と連携して広報を実施した。トークイベント「SOCIAL WORKERS TALK」では、6人の「SOCIAL WORKER」が集まり、「やさしいふつう」と「これからの働き方」について対談した。非福祉系大学生だけでなく、社会人も対象にイベントを周知し、実際に100名近くの参加があった。
- ✓ ④WEBサイトでは、事業コンセプトや「ソーシャルワーカー」のストーリー紹介、イベント告知、キャリアカウンセリング窓口などを掲載し、学生が福祉を認知・理解するための足掛かりを構築した。
- ✓ ⑤インタビューでは、イベントの参加経緯や感想を伺う中で、非福祉系大学生の潜在的なニーズを探った。COVID-19予防策のため、グループではなく、オンラインで1名ずつ合計7名に対して行った。
- ✓ ⑥イベント参加学生と福祉法人の10名前後の対話型イベントを企画していたが、COVID-19予防策のため中止となった。

事業内容詳細 | 福祉法人向け勉強会の開催

- ✓ 12月13日（金）秋葉原LIFORKにて、福祉法人向け勉強会を開催し、合計9法人の参加があった。
- ✓ 非福祉系大学生を受け入れることの必要性や受け入れ側の課題について有用な意見交換をする場となった。
- ✓ 意見交換では、今後も勉強会を開いてほしいという声や勉強会で取り組みたい事例についても活発な意見が出てきた。

■ 必要性和課題意識

- ✓ 非福祉系学生をもっと受け入れたい。福祉系学生は、制度の枠の中で福祉を語り、非福祉系学生は、福祉を楽しんでいる印象がある。
- ✓ 採用において、学生は、社会・人の役に立ちたいという福祉寄りな視点を持ち始めている。今の福祉の魅せ方が追いついていない。どうすれば関心を持ってもらえるか、その解を見つけたい。非福祉系学生に対する魅力づくりは、福祉系学生の魅力づくりに繋がる。
- ✓ 非福祉系学生を採用しているが、育成は成功できていない。理想と目の前の利用者支援の間で葛藤が生じやすい。
- ✓ 福祉系・非福祉系関係なく、なぜ我々はこのサービスやるのか、そこで起きるジレンマの価値や内的動機付けを大事にしていかなければならない。

■ 今後勉強会で取り組みたい事

- ✓ 非福祉系人材の研究をしたい。
- ✓ 将来的には、就職した非福祉系人材同士の勉強会や次世代ネットワークを築く場にした。
- ✓ 無資格の非福祉系人材を育てる育成・定着プログラムを一緒に作りたい。
- ✓ 20～30代の中堅社員が、自分たちの言葉で、福祉の理念や思想を語れるようになってほしい。
- ✓ 境界を超える面白さを体験する場を作りたい。



～参加法人～

社福法人ゆうゆう（北海道）、社福法人福祉楽団（千葉県）、社福法人武蔵野会（東京都）、社福人みねやま福祉会（京都府）、社福法人グループリガール（京都府）、社福法人くらしのハーモニー（京都府）、社福法人南山城学園（京都府）、NPO法人み・らいず（大阪府）、社福法人南高愛隣会（長崎県）

II 各事業別の取り組み内容 | 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業

事業内容詳細 | SOCIAL WORKERS TALKの実施

- ✓ 2月14日(金)・15日(土)にSOCIAL WORKERS TALK「やさしいふつうとこれからの働き方」のイベントを開催した。
- ✓ チケットページの閲覧数は2,400ページビュー、777「いいね」と146名のフォロワーを得られた。
- ✓ 非福祉系大学生に加え、福祉に興味のある社会人も幅広い職種からの参加があった。

申込数・参加者数	申込数			参加者数		
	総数	学生	社会人	総数	学生	社会人
東京開催 (@東京大学)	145名	58名	87名	80名	33名	47名
京都開催 (@GROVING BASE)	39名	17名	22名	31名	13名	18名
合計	184名	75名	109名	111名	46名	65名

● イベントチラシ



● イベント内容

イベント概要	時間	内容
Part1	130min	・ゲストスピーカーによるトークセッション／振り返り
Part2	20min	・SOCIAL WORKERS LABについて

● ゲストスピーカー

<東京開催>

安斎勇樹 (株式会社ミミクリデザインCEO)
 櫻本真理 (オンラインカウンセリングサービス創業者)
 村木厚子 (津田塾大学客員教授/元厚生労働事務次官)
 大原裕介 (社会福祉法人ゆうゆう理事長/北海道医療大学客員教授)

<京都開催>

高木俊介 (精神科医/ビール醸造会社創業者)
 小山龍介 (コンセプトクリエイター/フォトグラファー)
 大原裕介 (社会福祉法人ゆうゆう理事長/北海道医療大学客員教授)

～東京会場～



～京都会場～



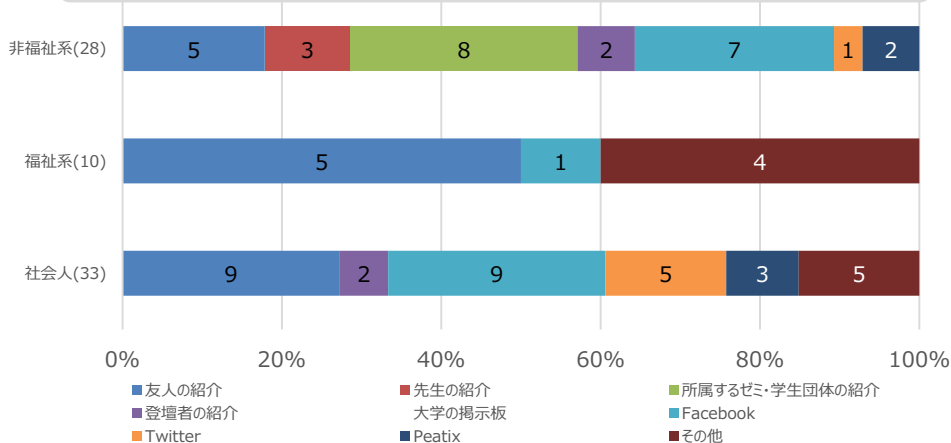
II 各事業別の取り組み内容 | 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業

事業効果測定 | 非福祉系大学生の参加率と参加理由

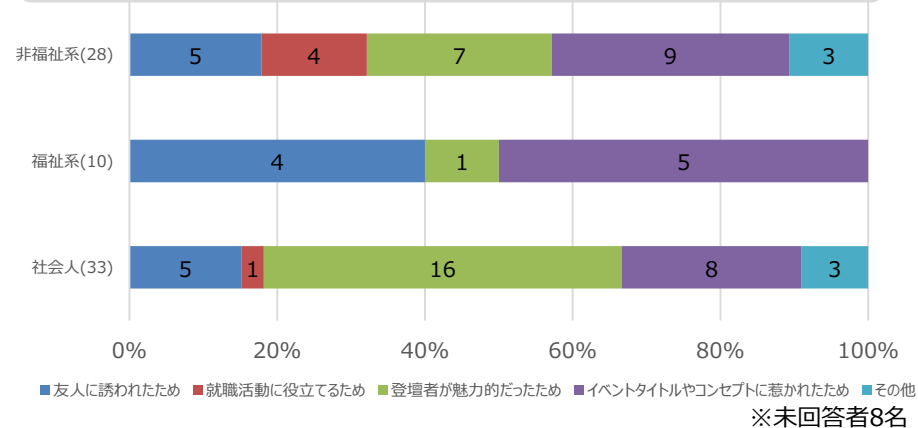
- ✓ アンケート回答をした学生38名のうち、非福祉系大学生は28名であった。学生のうち非福祉系大学生が約7割を占めた。
- ✓ 非福祉系大学生は、「Facebook」と「所属するゼミ・学生団体の紹介」がきっかけとなり、「イベントタイトルやコンセプトに惹かれて」参加した学生が多かった。
- ✓ 一方、福祉系学生は「友人の紹介」や「その他」の知人やイベントがきっかけとなり、「友人に誘われたため」参加した学生が多かった。
- ✓ 社会人の参加理由は、「登壇者が魅力的だったため」が最も多く、ゲストスピーカーの選定が申し込みにつながったことが想定される。

申込数・参加者数	参加者数			アンケート回答枚数			
	総数	学生	社会人	総数	学生	内、非福祉系	社会人
東京開催 (@東京大学)	80名	33名	47名	47名	25名	22名	22名
京都開催 (@GROVING BASE)	31名	13名	18名	24名	13名	6名	11名
合計	111名	46名	65名	71名	38名	28名	33名

Q.イベントを知ったきっかけ



Q.イベントの参加理由

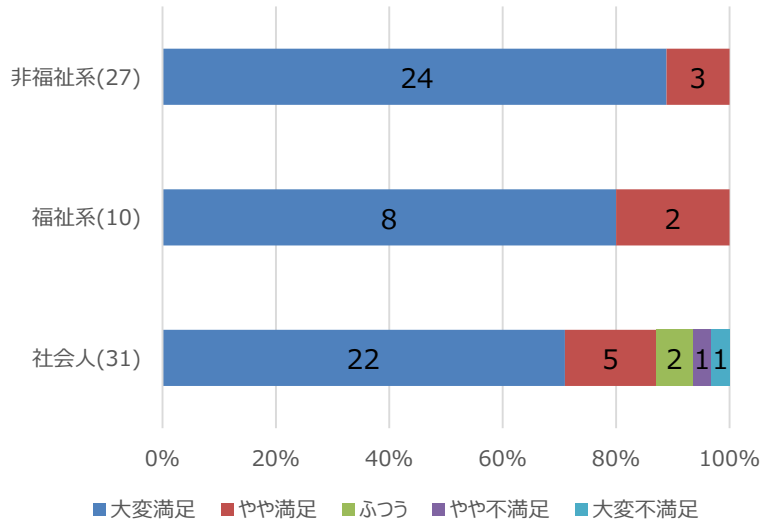


※未回答者8名

事業効果測定 | 参加者の満足度

- ✓ 主対象である非福祉系大学生の満足度は「大変満足」が89%と比較的高かった。全体を通して、7割以上が「大変満足」と回答していた。
- ✓ 非福祉系大学生の回答では「自分の視野では見れないものが見えた」や「今まで関心の薄かった福祉分野の知識が得られた」などの声が、一定層の学生に対し福祉の視野を広げることができたと結論付けられる。

Q.イベントの参加満足度



※未回答者3名

Q.満足度評価の理由

非福祉系大学生

- ✓ 自分の視野では見れないものが見えた。
- ✓ 今まで関心の薄かった福祉分野の知識が得られた。
- ✓ 就活で社会貢献を重視しているが、利益第一と感じる会社が多くモヤモヤしていた。ソーシャルワークをどういものか知り、モヤが晴れた。
- ✓ 自分の考えを刷新させる機会になってよかった。登壇者の方と参加者のインタラクションがあったらなおよかった。

福祉系大学生

- ✓ 福祉と他分野がクロスして生まれる新たな可能性を感じられた。
- ✓ 社会福祉を学び、知識をどういすべきか悩んでいたため、今回参加して自分の考えを整理できました。

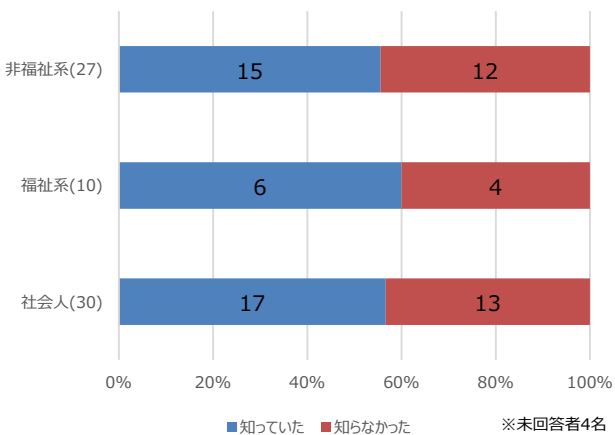
社会人

- ✓ 福祉という分野の捉え方考え方が変わった。
- ✓ 各業界の方の異なる視点で、つながる事のすばらしさ、意味を改めて知る事ができた。

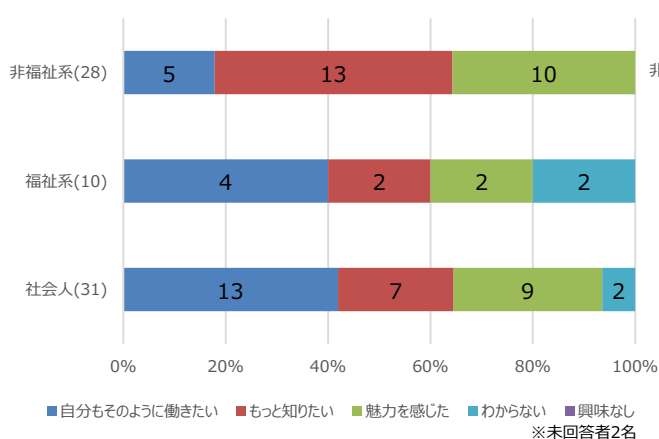
事業効果測定 | 福祉の仕事に対する興味・関心

- ✓ 「福祉」という言葉を広義で捉えるため、当事業では「ソーシャルワーカー」という言葉を再定義し、イベントで使用した。「ソーシャルワーカー」としての働き方を魅力づけることで、福祉の仕事に対する興味・関心づけを狙う。アンケートでは、「ソーシャルワーカー」への興味・関心度と「社会福祉」への関連付けを行った。
- ✓ 「ソーシャルワーカー」という働き方・生き方に関して、「知っていた」と回答したのは、全体の約半分だった。
- ✓ 非福祉系大学生にとって、「ソーシャルワーカー」という働き方・生き方は、「もっと知りたい」「魅力を感じた」という回答が多く、「自分もそのように働きたい」という割合は福祉系学生・社会人に比べて低かった。
- ✓ コンセプトに何となく惹かれて参加した非福祉系大学生たちは、イベントに参加し、ゲストスピーカーが現場の生々しさや魅力を語る姿を見聞きすることで、ソーシャルワーカーとしての生き方を知り、興味・関心は上がったが、自分も同じように働くという意味ではもう一歩動機付けが必要であることがわかった。
- ✓ 「ソーシャルワーカー」と「社会福祉」の関連付けについても、非福祉系大学生には、「やや理解できる」がもっとも高く、今後の活動を通じて、「社会福祉」の魅力づけを行う仕掛けが必要であることがわかった。

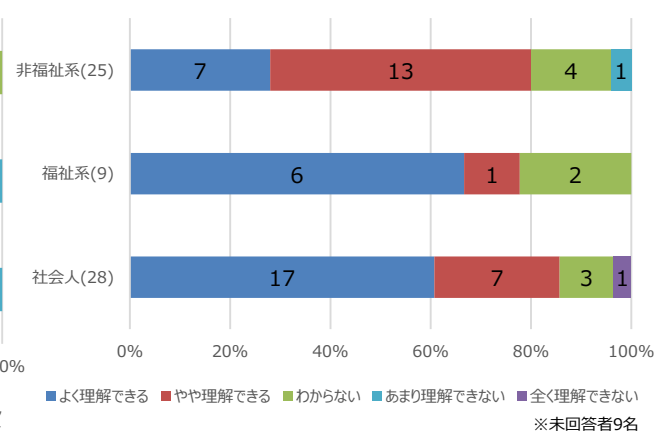
Q.ソーシャルワーカーという働き方・生き方を知っていたか



Q.ソーシャルワーカーという働き方・生き方について、今感じているもの



Q.ソーシャルワーカーという働き方・生き方は「社会福祉」の分野・領域で実現できるように感じたか



事業効果測定 | 参加者へのインタビュー

- ✓ COVID-19予防策のため、グループではなく、1名ずつ合計7名のオンラインインタビューを行った。（東京4名、京都3名）
- ✓ 紙面アンケートの選択肢からは読み取れない、参加者に響いた言葉や考え方等を聞き出すことができた。
- ✓ イベント参加背景は、人との繋がりやタイトルへの共感が足を運ぶきっかけとなったことがわかった。
- ✓ イベントを通じて、職業選択の幅を広げたり、福祉を意識し始めるきっかけとなったことがわかった。
- ✓ 今後の活動に期待する声を確認できた。

■ イベント参加背景

- ✓ ボランティアで知り合った女性からFacebookのメッセージで紹介してもらった。
- ✓ ゼミで、先輩がイベントの宣伝をしていて知った。色んなことをしている4人の話が聞けるのでとりあえず参加してみようと思った。
- ✓ サークルのSlackで情報を知る。「やさしいふつうとこれからの働き方」というワードに「あ、そうだよな」って共感した。大学でお話をきける手軽さもあった。

■ イベントの感想（気づきや変化）

- ✓ ソーシャルワーカーという言葉の再定義したいという内容が面白いと思った。ソーシャルワーカーに対して、そういう言い方をするんだなぐらいだったが、福祉の領域でそういうこと考えている人がいると知れた。ソーシャルワーカーの背景には何があるんだろう？と自分の中に新たな問いが出てきた。
- ✓ 去年1年就活する中で、自分に大事なものは給料ではなく、社会貢献できるかであることに気づいた。社会貢献できるようなものづくりをしている企業やベンチャー探したけどまだしっくりしていない。今回初めて、福祉介護という話をきいた。将来の未来の選択肢が増えたのが楽しかった。こういうのもありなんだな、という後押しをもらった。
- ✓ 期待していなくてよかったのは福祉について。これまで興味持たなかった分野だったが、創意工夫しながらイメージを覆そうとしていることがわかった。福祉や環境で活動している人って聖人というイメージがあった。何でそんなことできるんだろうと思っていた。でも話を聞いて、実は福祉は僕とも関係があった、ということに気づけた。福祉に意識が向くきっかけになり、日々の情報の中で福祉に対するアンテナが広がった。

■ トークイベントの改善点や今後SWLに期待すること

- ✓ 参加者同士のコラボレーションがあればもっと満足度は誘発できた。今回インタビューに参加しようとおもったのは、どういう人たち、どういう考え方の人が参加したのか興味があって、話してみたい、対話したいと思ったから。参加者や事務局とも対話できる場がほしい。
- ✓ 介護や福祉に興味ある人は、クラス40人中1、2人くらい。思いを持った人どうしが集まったら、何か始まりそう。意見交換ができるSNSみたいなプラットフォームがあるとよさそう。

II 各事業別の取り組み内容 | 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業 事業内容詳細 | WEBサイトやTwitterでの情報発信

- ✓ 事業コンセプトや「SOCIAL WORKER」のストーリー紹介、イベント告知、キャリアカウンセリング窓口など、「SOCIAL WORKERS LAB」一連の取り組みをWEBサイトに掲載し、サイト来訪者と「SOCIAL WORKER」との接点を作った。
- ✓ 「SOCIAL WORKER」のストーリーとして、ゆうゆう大原氏が社会福祉法人設立に至った背景や、トークイベントの登壇者である高木氏、小山氏の講演内容を掲載。今後も継続的な記事更新を予定している。
- ✓ Twitterを通じて、トークイベントの告知や当日のライブ配信を行った。Twitterでは1月～3月の3ヶ月間で、42,584インプレッション、プロフィールへの1,948アクセス、136フォロワーを獲得した。今後も継続的な情報発信を予定している。

■ 取り組み紹介

The screenshot shows a blue-themed website interface with the word "ACTION" at the top. It is divided into three main columns of activity options:

- SOCIAL WORKERと出会う** (Meet Social Workers): Includes "Webメディア" (with a sub-link to "100 stories of 100 SOCIAL WORKERS" and a "noteで読む" button) and "TALK イベント" (with a sub-link to "SOCIAL WORKERS TALK").
- SOCIAL WORKERと関わりあう** (Engage with Social Workers): Includes "MEET UP イベント" (with sub-links for "SWLab DIALOGUE" and "プロジェクト&インターンシップ") and "100 stories of 100 SOCIAL WORKERS" (with sub-links for "東京会場 2/28 (金) [中止]" and "京都会場 2/29 (土) [中止]").
- SOCIAL WORKERとしてのキャリアを問う** (Ask about careers as Social Workers): Includes "キャリア・コーチング" (with a sub-link to "1on1 Coaching-Session") and a "詳細・お申し込み" button.

On the right side of the interface, there are icons for email, a question mark, and social media links for Twitter, Facebook, and Instagram.

■ ストーリー紹介記事-stories of 100 SOCIAL WORKERS-

The screenshot shows a Twitter thread from the account "SOCIAL WORKERS LAB". The thread title is "stories of 100 SOCIAL WORKERS". The first tweet is titled "[1/100] 社会福祉家 大原裕介 越境の物語" and contains the text: "「社会をよくすることをしたいなら、株式会社より社会福祉法人を経営するほうがおもしろい。僕は、そういう時代がすぐそばにきていると思う。」". It has 11 retweets. The second tweet is titled "| Prologue | 100 stories of 100 SOCIAL WORKERS、始動。" and contains the text: "ソーシャルワーカーという言葉をもっと広く聞いていく運動を始めます。それがソーシャルワーカーコース・ラボだ。ソーシャルワーカーは、物語を和。". It has 6 retweets. The thread also includes a "設定" (Settings) button and a "シェア" (Share) button at the bottom.

事業総括と今後の課題

1. 「SOCIAL WORKER」という表現を使用し、新しい価値や職業の選択肢を届けた

- ✓ 「SOCIAL WORKERS LAB」という事業コンセプトを設計し、2月のトークイベント「SOCIAL WORKERS TALK」では、対象となる非福祉系大学生約30名と接点を持った。その中で、「SOCIAL WORKER」という新たな価値を知ることができて良かったという感想を多数得られ、福祉現場のリアルな輝きが学生にインパクトを及ぼすことが確認できた。
- ✓ 学生へのインタビューより、「福祉・介護で働くことを見落としていた、将来の選択肢が増えた」「福祉は自分と関係があったことに気づいた、福祉に意識が向くようになった」という福祉領域に対する理解を深められたことが確認できた。

2. 福祉の魅力を伝えるための情報発信基盤を確立した

- ✓ イベントを通じて学生へ影響を及ぼすステークホルダーとの接点作りや、福祉業界への足掛かりとなるWEBサイト「SOCIAL WORKERS LAB」やSNSアカウントの構築ができた。これにより、次年度以降の活動基盤が整備され、更なる情報発信が可能となった。
- ✓ 「SOCIAL WORKERS LAB」としての情報発信を力を上げ、より多くの非福祉系大学生に認知してもらえるメディアを目指す。サイトアクセス数やSNSのフォロワー数等を計測し、検証を継続して行う必要がある。

3. 非福祉系大学生に対し、就職に向けた具体的アプローチを打ち出す

- ✓ COVID-19予防策のため中止となった学生と福祉法人の対話型イベントを再検討する。
- ✓ 学生が利用しやすいキャリアカウンセリング窓口の動線を再検討する。
- ✓ 興味関心をもった非福祉系大学生に、福祉法人と実践現場で関わるプロジェクト型インターンシップや採用マッチングの場を企画し、就職に向けた具体的アプローチ策を打ち出していく。

4. 福祉法人と共に、非福祉系大学生を受け入れる体制を模索する

- ✓ 9社の良質な福祉法人から「SOCIAL WORKERS LAB」のコンセプトに共感をいただき、非福祉系大学生を採用・育成・定着していくために協働していきたいという反応を得られた。
- ✓ 非福祉系大学生を福祉業界で活用する取り組みは、まだスタートしたばかりであるため、これら実践研究のプロセスや方法論・成果などを共有しながら、試行錯誤しながら実践知を養う必要がある。

I 若年層向け魅力発信事業について

II 各事業別の取り組み内容

- 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業
- 2 福祉・介護BOOK制作出版事業
- 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業
- 4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業
- 5 アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業

III 全体総括

事業の全体像

●事業の目的

- ・ 若者向けファッション雑誌と介護論考集という2つの出版物を制作し、市場展開することを通じて、若年層の福祉・介護に対するイメージをポジティブなものへと変換する。

●実施内容

- ・ ネット記事のような一過性ではないコンテンツとして、以下の2つの出版物を制作した。

①福祉介護BOOKの制作：雑誌「POPEYE」3月号の広告特集として「福祉のしごとって？」を制作

出版社：株式会社マガジンハウス

出版規模：POPEYEとは若者男性向けファッション誌。直近の発行部数は85,167部（2019年12月）

総発行部数：POPEYE本紙に加え、別冊bookを50,000部制作

②学生向け介護論考集（小冊子）の制作：「学食で読める福祉のはなし」の制作

（「大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業」の内容を小冊子化）

出版社：株式会社河出書房新社

総発行部数：3,000部制作

●効果測定の方法

対象：福祉BOOK、介護論考集の読者（主に若者）

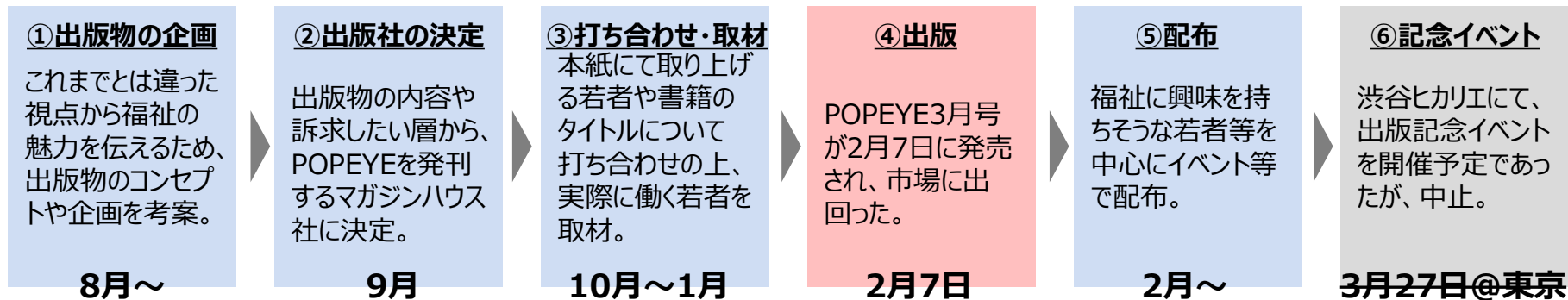
内容：書籍の内容を読んだ上での福祉に対するイメージの変化

手法：読者へのインタビュー調査

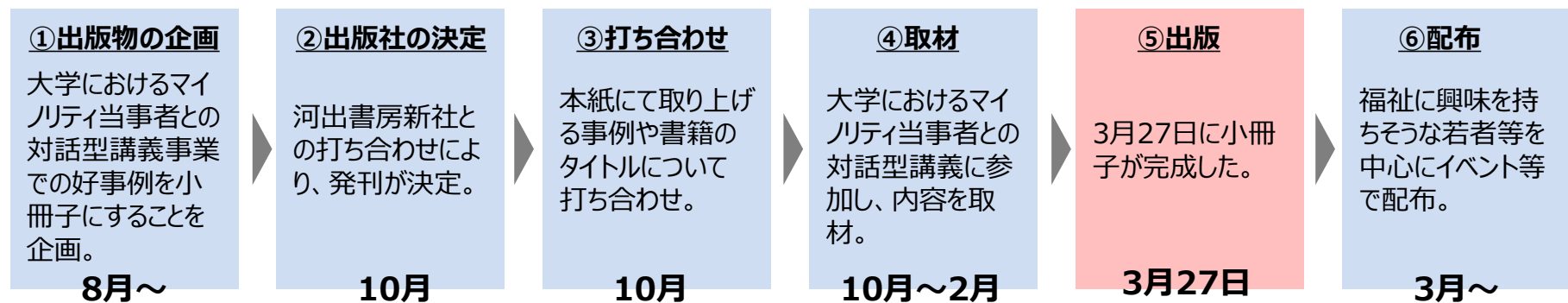
事業概要図

✓ 本業務は以下の通り進めた。POPEYEへの出版記念イベントを予定していたが、Covid-19の影響により中止となった。

■ 福祉介護BOOK制作

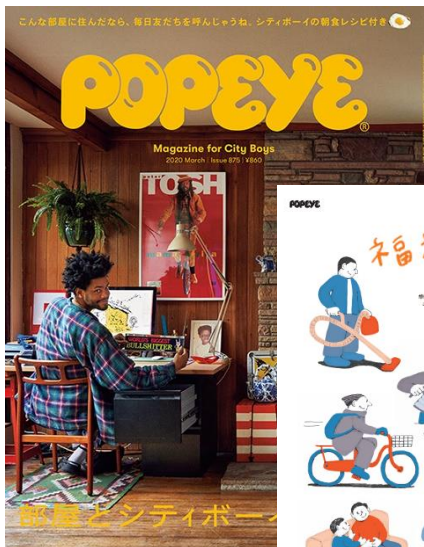


■ 介護論考集の制作



事業内容詳細 | ①福祉・介護BOOKの制作

- ✓ 雑誌「POPEYE」の広告特集として2月7日に発刊。16ページでの特集記事「福祉のしごとって？」を掲載。別冊50,000部も制作。
- ✓ 取材形式の「こんな仕事があったのか」、コラム形式の「これも福祉」など、福祉の仕事の幅広さと楽しさを伝える内容とした。



(POPEYE3月号)



(特集記事表紙)



(「こんな仕事があったのか」)

～特集された若者～

1. 照井大さん / 31歳
障がい者就労支援 栗源第一薪炭供給所 (千葉県)
2. 小嶋直也さん / 26歳
特別養護老人ホーム 同和園 (京都)
3. 山口泰平 / 24歳
児童養護施設乳児院みねやま福祉会てらす峰夢 (京都)
4. 工藤勇希さん / 30歳
訪問介護 ケアリッツアンドパートナーズ (東京)
5. 吉高湧さん / 24歳
サポートホーム ほっとポット (埼玉)
6. 御代田太一さん / 25歳
救護施設 ひのたに園 (滋賀) 生活支援員
7. シアトル特別編
 - ① 佐伯悠磨さん
生活介護事業所 にきよにき (北海道)
 - ② 宮原砂織さん
凸凹保育園 (神奈川)
 - ③ 西山啓介さん
障がい者就労支援 栗源第一薪炭供給所 (千葉県)

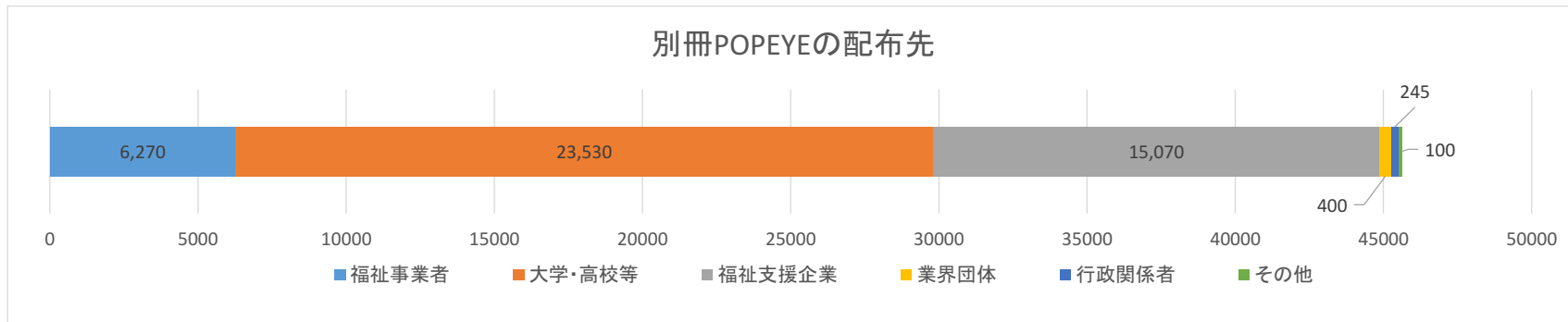
事業効果測定 | ①福祉・介護BOOKの制作 | 別冊「POPEYE」の配布先

✓ 福祉に興味を持ちそうな若者に行き渡ることを目的とし、45,615部を配布済・配布予定である。(2020年3月31日現在)

■主な配布先

	配布先	ターゲット層	配布部数
業界団体への配布	全国社会福祉協議会	全国経営協主催「法人ブランディング&広報PRセミナー」(東京会場・福岡会場)参加者	300
	公益社団法人 日本介護福祉士会	日本介護福祉士会の会員	100
福祉事業者への配布	社会福祉法人を中心とした福祉事業者 (20法人・事業所)	社会福祉法人への就職を検討している層	6,270
大学等への配布	福祉分野を中心とした各大学の教授等 (23大学)	福祉に何らかの形で関係する教授のもとで学ぶ大学生	2,400
	大学の書店のレジ袋への封入等	大学構内の書店で買い物をする大学生	20,000
就職イベントでの配布	株式会社ディスコ	合同宅配DM「福祉EXPRESS便!!」で学生に配布	10,000
	一般社団法人 FACE to FUKUSHI	福祉分野への就職に興味を持っている学生	3,000

■分野別配布先一覧

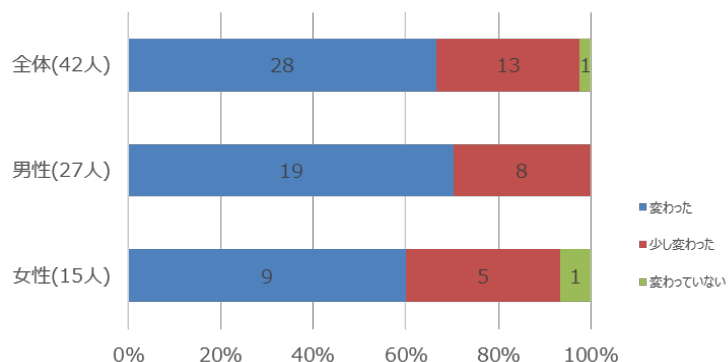


事業効果測定 | ①福祉・介護BOOKの制作 | 読者インタビュー

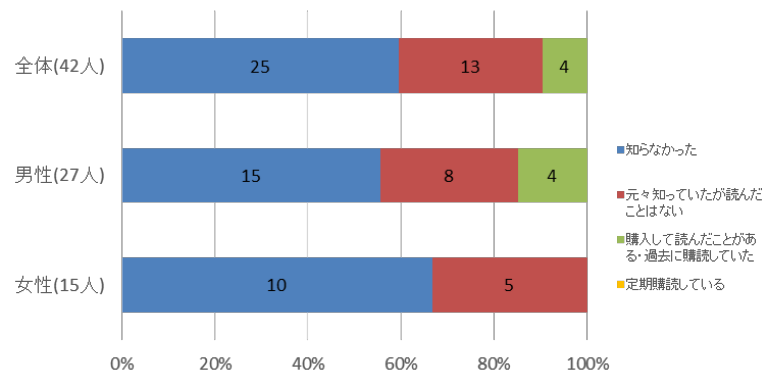
- ✓ 別冊POPEYEを配布したイベントにて、42名に口頭のインタビューを行った。(42名内訳：男性27名、女性15名)
- ✓ POPEYEについては元々知らなかったという人が多くを占めた一方で、POPEYEを読むことで福祉への印象が変わったという声が多かった。福祉に対するイメージアップに一定の効果があったものと推察する。

※POPEYEの配布、およびインタビューを行ったイベントは、2月14日「やさしい普通とこれからの働き方」(東京) 2月16日「リアルゼミ祭り2020」の2つ。

福祉への印象変化



POPEYEについて



実際のコメント

- ✓ ポパイの福祉の内容は今始めてみたが、面白いと感じた。色々な働き方があるということに気付いた。(20代学生)
- ✓ 工学系のゼミに所属しており、これまであまり「福祉」を知る機会はなかった。現在、別業界(コンサル関係)に既に就職は決まっているが、福祉を知る良いきっかけになった。(20代学生)
- ✓ POPEYEは昔読んだことがあるが、これまでこのような企画はなかったと思う。若者が福祉に触れる機会、接点を作り出せると良いと思う。(50代社会人)

事業効果測定 | ①福祉・介護BOOKの制作 | SNSやメディアの反応

- ✓ 2月号POPEYEが発刊されると、TwitterやFacebookなどのSNSや、Yahoo!ニュースの記事で取り上げられた。
- ✓ SNSでは発信者数やフォロワー数で大まかな閲覧者数が予測できるため、以下にまとめている。

媒体	総フォロワー数	リツイート者数・シェア件数	総いいね数
Twitter	5,025人（上位10名合計）	85人	261人
Facebook	29,927人（上位10名合計）	153件	1,495件

※ 検索上位10名の方の投稿における、リツイート数やいいね数、またそのアカウントのフォロワー数をカウントしている。
 ※ 2020年3月18日検索時点



(Twitterより)



(Facebookより)

雑誌・POPEYEで「福祉の仕事」特集 現場の若手職員が魅力をアピール

3/5(木) 10:04配信

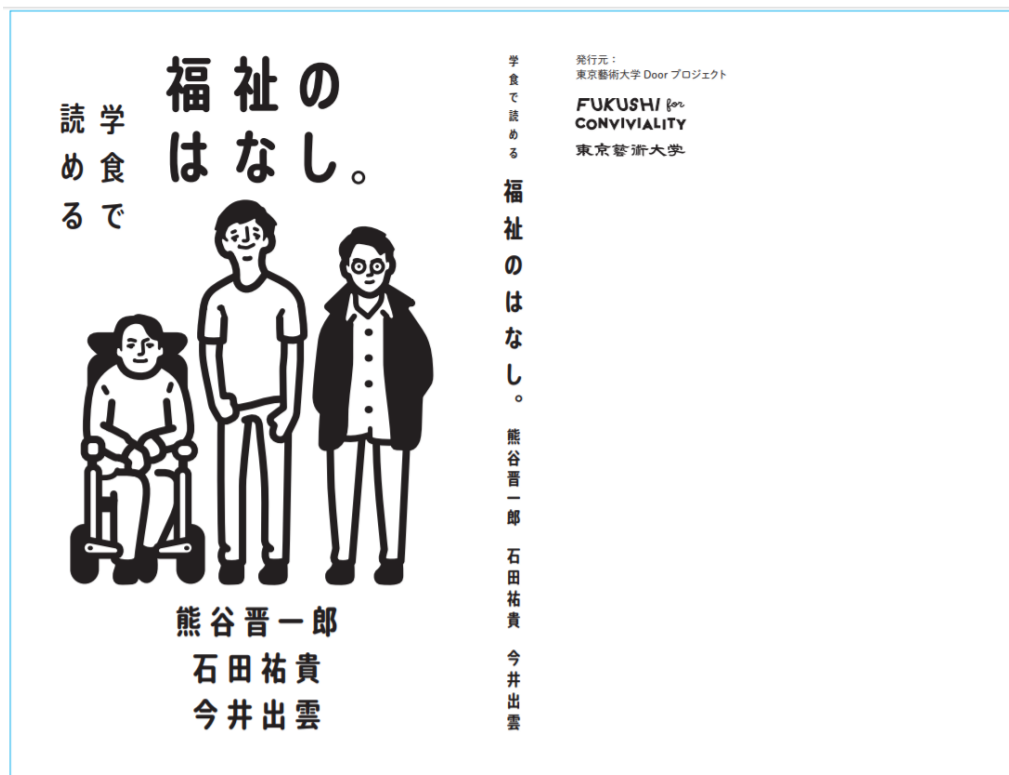
福祉新聞
THE FUKUSHI SHIMBUN

雑誌「POPEYE」（マガジンハウス）は2月7日発売の3月号で、福祉の仕事特集を掲載した。高齢、障害、子ども、困窮者など現場で働く若手職員を紹介。16ページにわたり写真と記事で魅力を伝えている。

(Yahoo!ニュースより)

事業内容詳細 | ②学生向け介護論考集（小冊子）の制作

- ✓ 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業での取り組みを小冊子として取りまとめ、福祉に興味のある方への読み物として活用する。
- ✓ 「学食で読める福祉のはなし。」とし、主に学生向けの小冊子を3,000部制作し、2,072部配布済み。（2020年3月31日現在）



(表紙)

～著者紹介～

1. 熊谷晋一郎 氏

「障害はどこ？ 障害者はだれ？」
1977年山口県生まれ
東京大学先端科学技術研究センター准教授

2. 石田祐貴 氏

「僕はこの世界にいる意味を探し続ける」
1992年大阪府生まれ
筑波大学大学院人間総合科学研究科在籍

3. 今井出雲 氏

「性と生のあわいで」
1995年東京都生まれ
東京大学文学部社会学専修過程在学中

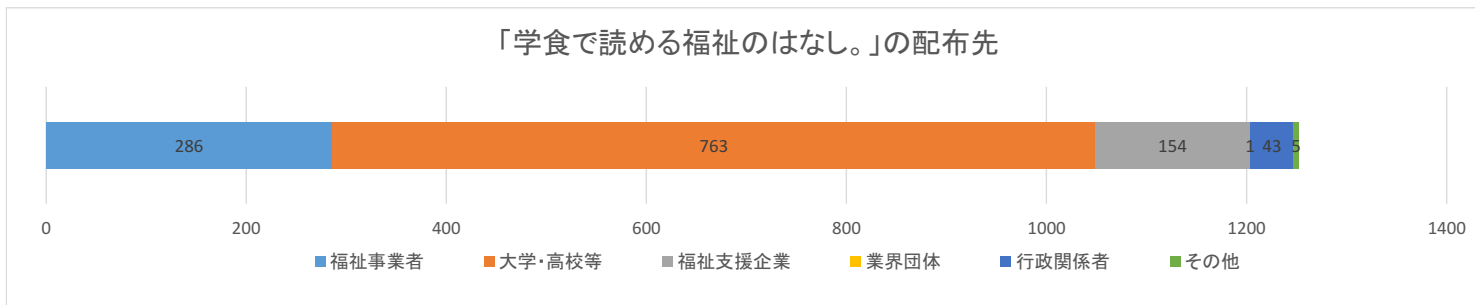
事業効果測定 | ②学生向け介護論考集（小冊子）の制作 | 小冊子の配布先

✓ 学生向け小冊子であるため、大学生を中心とした若者の手元に届くよう、以下の先に配布した。

■大学等への配布先

No.	配布先	配布数	No.	配布先	配布数
1	駒澤大学 文学部 社会学科 社会福祉学専攻	30	13	津田塾大学 総合政策学部 総合政策学科	30
2	千葉大学 学務部学生支援課 学生相談室	30	14	大阪府立大学 大学院 人間社会学研究科	30
3	千葉大学 大学院人文科学研究院長	30	15	田園調布学園大学 人間福祉学部	30
4	東洋大学 社会学部 社会福祉学科	30	16	千葉商科大学 人間社会学部 人間社会学科	30
5	立教大学 コミュニティ福祉学部 福祉学科	30	17	東京家政大学 人文学部 教育福祉学科	30
6	東海大学 健康科学部 社会福祉学科	30	18	関西大学 社会学部	30
7	専修大学 就職部 就職課	30	19	実践女子大学 人間社会学部 人間社会学科	30
7	法政大学 社会学部教授 教授会主任	30	20	東京外国語大学 大学院総合国際学研究院	30
8	成蹊大学 文学部	30	21	中央大学 法学部	30
9	東京農業大学 学室長	30	22	西武文理大学 サービス経営学部 健康福祉マネジメント学科	30
10	北星学園大学 社会福祉学部 福祉計画学科	30	23	甲南大学 文学部 社会学科	30
11	武蔵野大学 人間科学部 社会福祉学科	30	24	東京都立高島高等学校 公民科	30
12	日本福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科	30	25	鷗友学園	10

■分野別配布先一覧



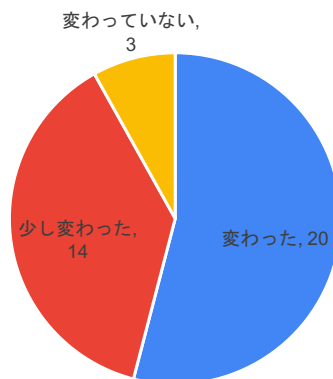
事業効果測定 | ②学生向け介護論考集（小冊子）の制作 | 読者の感想

- ✓ 小冊子の読者に対し、webでのアンケート（2020年3月25日～2020年4月20日）を実施した。
（COVID-19の影響により、主要層である学生の回答数が少なくなっている）
- ✓ 読者のほとんどが小冊子を読むことで福祉のイメージ変化につながったと回答している。

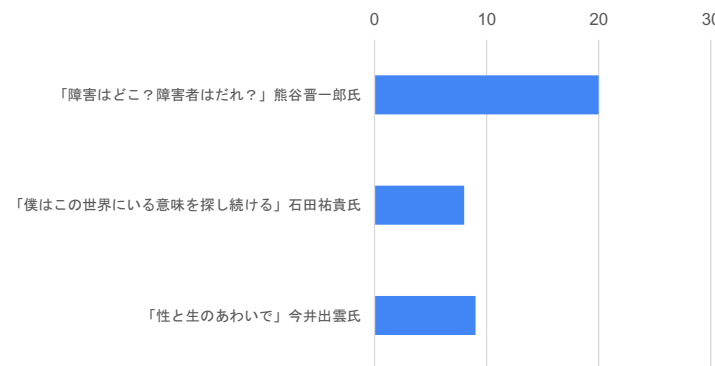
■回答者の属性

区分	人数
学生	16名
社会人	21名
合計	37名

福祉に対する印象変化



特に印象に残った内容



実際のコメント

- ✓ 最後に設けられていた飯田大輔さんの文章がよかったです。自身が介護に携わることになった当時から、ドライな質感のナラティブで語りながらも、自身の仕事の意義を深いところから汲み上げて語られていて痺れました。（学生）
- ✓ 非常に興味深い本でした。福祉の領域は、未だ「関わろうとしなければ、関わらないでも良い（関わらずとも暮らしていける）」部分もあるかと思います。こうした形で当事者の言葉で、実体験を持って語られる話は生々しく、興味深いものでした。（社会人）
- ✓ これを読み、大学で手話の授業を受けていた時に先生が問いかけた「障がいて何？」「健常と障がいの境界線って何？」の言葉が想起された。視点を変えるだけで、我々は皆障がい者になり得るし、健常者になり得る。自身の考えを相手に押し付けない、みんなが他人に干渉しない、自由に生きられる世の中になればいいと思う。（学生）
- ✓ 本冊子を読み、いかに自分が現代社会の中で無意識のうちに擦り込まれた固定概念に捉われているかを感じた。今後はあらゆるマイノリティなものに対して、一方向からだけでなく、多角的にみる力を養いたいと思った。（社会人）

事業総括と今後の課題

1. 単なるイメージアップではない、福祉の本質をとらえた制作物とすることができた

- ✓ 雑誌POPEYEの特集記事、介護論考集のいずれにおいても、出版社との密な打ち合わせにより、デザイン性の高いものとなっただけでなく、複数の福祉関係者が制作に携わり、福祉の本質をとらえた制作物とすることができた。これにより、表面だけのイメージアップではない、福祉のしごとそのものへの興味・関心が高まることが期待される。
- ✓ 普段福祉と関わるのが少ない読者層に対して、福祉の情報を届けることにより、福祉に対する認知を広げることができた。実際にアンケートの結果からも肯定的な意見が多く挙がったことから、一定の効果があったといえる。

2. SNSやネットニュースなどの媒体を通じ、広告費用をかけることなく、制作物を広げることができた

- ✓ 若者に対する情報発信の手段としてSNS（Facebook、Twitter、等）を活用し周知を行ったり、ネットニュースに取り上げられたりと、ネット媒体を通じた露出が可能となった。これらは、一切広告費用をかけずに実施できた。
- ✓ このことから、コンテンツ自体の工夫や、社会への影響力のある方を巻き込むことにより、高い宣伝効果を安価なコストで得ることができることとなった。

3. 福祉の魅力発信のためには、一時的なものではなく継続的な取り組みが必要である

- ✓ 今回の取り組みを通じて、普段福祉と接することのない若者層に対して、情報発信を行うことができた一方で、その取り組みの効果は依然限定的である。この取り組みを継続して続けるとともに、一貫性のあるものとするにより、本補助事業の目的である「介護のしごとの魅力発信」につながるものとする。

I 若年層向け魅力発信事業について

II 各事業別の取り組み内容

- 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業
- 2 福祉・介護BOOK制作出版事業
- 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業**
- 4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業
- 5 アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業

III 全体総括

事業の全体像

●事業の目的

- ・マイノリティ当事者が、大学に直接赴き、学生と対話型の講義をすることで、マイノリティへの理解や、福祉の仕事の重要性を、身を持って感じられる機会を作る。その結果、参加者のダイバーシティへの気づきや創造性への理解を深め、福祉や介護の仕事の本質的な理解を促し、福祉の仕事の魅力や奥深さを知ってもらう。
- ・マイノリティ当事者との対話型講義に参加した学生、企画運営に携わった学生や教員に、福祉を身近に感じてもらうことで、世界観を広げてもらう。価値判断基準に刺激を与え、福祉や多様性を受け入れてもらう。考え方の変化、またどのような創造的思考が生まれたかを捉える。

●実施内容

- ・毎講座異なるマイノリティ当事者が授業の講師となって登壇し、対話型の講座を行う。講座は計8大学で開催した。

開催大学	東京大学	京都大学	東京工業大学	早稲田大学	植草学園大学	関東学院大学	横浜国立大学	松山大学
都市	東京都	京都府	東京都	東京都	千葉県	神奈川県	神奈川県	愛媛県
開催回数	7回	8回	7回	10回	6回	6回	6回	1回
運営方式	自主ゼミ	自主ゼミ	自主ゼミ	自主ゼミ	授業枠	公開講座	授業枠	公開講座

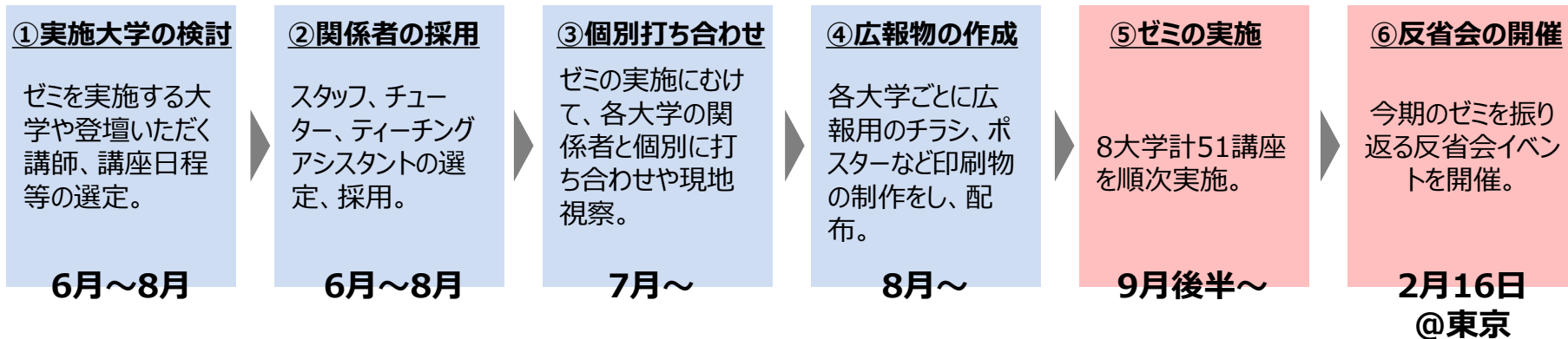
●効果測定の方法

・各大学での講義

対象	①講義受講者	②講座運営に携わった学生	③講座運営に携わった大学教員
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・参加満足度 ・福祉に対するイメージ ・就職の選択肢 等 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加満足度 ・福祉に対するイメージ変化 等 	<ul style="list-style-type: none"> ・満足度 ・効果実感 等
手法	紙面およびwebによるアンケート	Webアンケート	メールでの回答

事業概要図

✓ 本業務は以下の通り進めた。



開催大学	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
東京大学	9/30	10/7	11/11	11/18	12/2	1/20	1/27			
	19人	17人	22人	25人	15人	18人	19人			
京都大学	10/10	10/24	11/7	11/28	12/12	12/26	1/9	1/23		
	18人	27人	19人	41人	20人	12人	26人	25人		
東京工業大学	9/27	10/25	10/29	11/5	12/3	12/17	12/23			
	17人	9人	8人	9人	12人	14人	8人			
早稲田大学	10/10	10/24	11/7	11/21	11/28	12/5	12/12	12/19	1/9	1/23
	9人	10人	12人	25人	20人	8人	6人	11人	12人	10人
植草学園大学	10/9	10/23	12/18	1/8	1/15	1/29				
	110人	120人	110人	105人	112人	112人				
関東学院大学	10/5	10/12	10/19	10/26	11/2	11/16	1/11			
	35人		30人	45人	23人	48人	8人			
横浜国立大学	11/12	11/19	11/26	12/3	12/10	12/17				
	22人	20人	18人	15人	15人	30人				
松山大学	2/11	2/22	2/23	2/24	3/13	3/14	3/15			
	53人									

※ 関東学院大学の第2回目は台風のために延期になり、代わりに補講として1月11日に開催された。

※ 松山大学の第2回～第7回の3回の講座はCOVID-19の影響で中止となった。

Ⅱ 各事業別の取り組み内容 | 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業

事業内容詳細 | 各大学での講座

- ✓ 各大学での講座の様子を掲載する。(一部紹介)
- ✓ 大学ごとに実施形態や参加者層が異なるため、写真からでも授業雰囲気の相違がわかる。



6年目の東京大学では初回から多くの方が集った。



関東学院大学では、ゲストを囲んで対話を行った。



植草学園大学では野沢先生の『障害インクルージョン論』という授業枠で開催したため大講義室で100人近くの学生が参加した。



松山大学では、社会人も混じってのグループワークを開催した。

Ⅱ 各事業別の取り組み内容 | 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業

事業内容詳細 | 広報物

✓ 各大学で掲載した広報物をいくつか紹介する。



松山大学



早稲田大学



関東学院大学



京都大学



東京工業大学



横浜国立大学



東京大学

- ✓ 2月16日、2019年度当事者ゼミの活動を振り返る「大反省会」が開催された。
 - 主催/場所
「障害者のリアルゼミに迫る」ゼミ/東京大学駒場キャンパス
 - 参加者数
計66名（内訳：学生20名、リアルゼミ卒業生7名、社会人39名）
 - 開催目的（広報紙を一部抜粋）
「リアルゼミ祭り2020」では、これまでにお世話になった皆様への感謝の気持ちを込めまして、そして今後も充実した活動ができるよう、「大反省会」を開催しました。



● イベント内容

イベント概要	時間	内容
午前の部	11時00分 ～12時30分	<ul style="list-style-type: none"> ・2019年度リアルゼミ活動報告 東大ゼミ（駒場）、東大ゼミ（本郷）、東工大ゼミ、早稲田ゼミ、植草学園ゼミ
午後の部	13時30分 ～17時00分	<ul style="list-style-type: none"> ・瑞宝太鼓による和太鼓公演 ・リアルゼミ大反省会 学生トークセッション ・飯田大輔さん（社会福祉法人福祉楽団）、馬場拓也（社会福祉法人愛川舜寿会）さんと学生のトーク

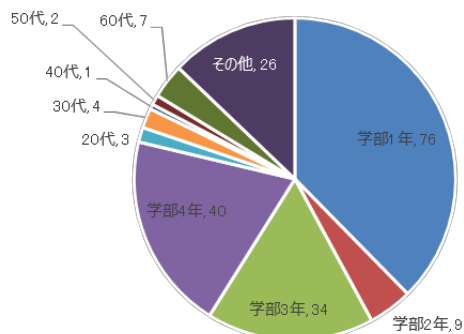


事業効果測定 | ① 講座参加者アンケート | 参加者属性 / 参加理由

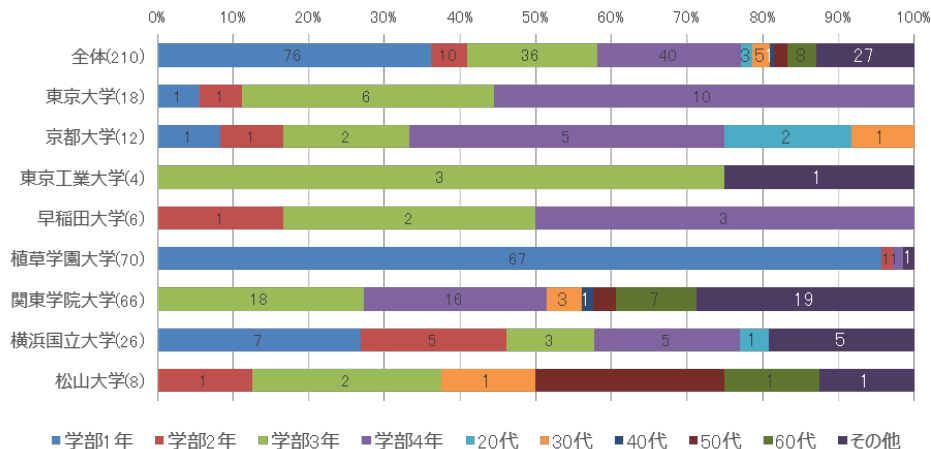
- ✓ アンケート回収分における参加者の属性を記載している。
- ✓ 植草学園大学が学部1年生中心の講義であり、関東学院大学は公開講座であるため社会人参加が半数以上を占めた。

- ✓ 参加動機として、「本テーマに興味があったから」が最も多く、次に「知人に勧められたから」「当事者をお招きする授業形態に関心を持ったから」が続く。（単位認定される対象大学は植草学園のみであるため除く）

Q.参加者の属性



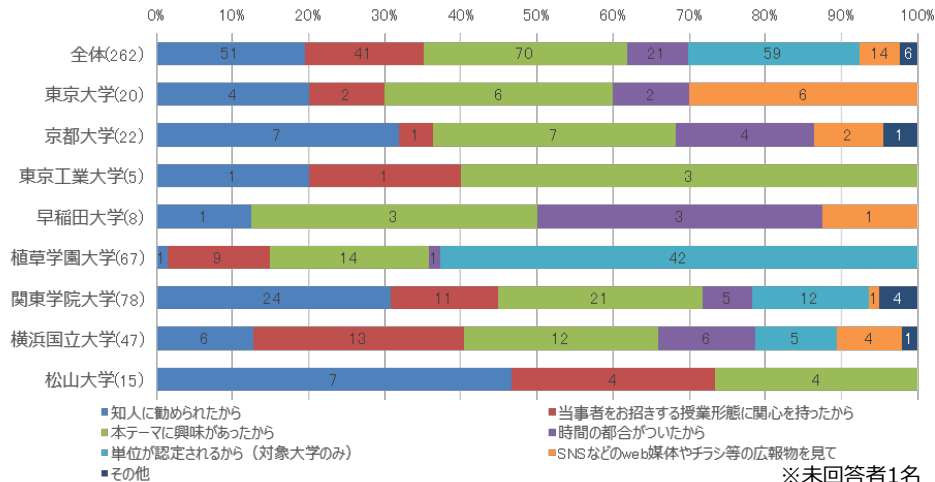
Q.参加者の属性



※未回答者53名

※ 本講座を主導している野沢先生の授業内で行っているため、植草学園大学は単位認定されているが、その他の講座は各大学の単位認定されるプログラムではない

Q.講座に参加した動機

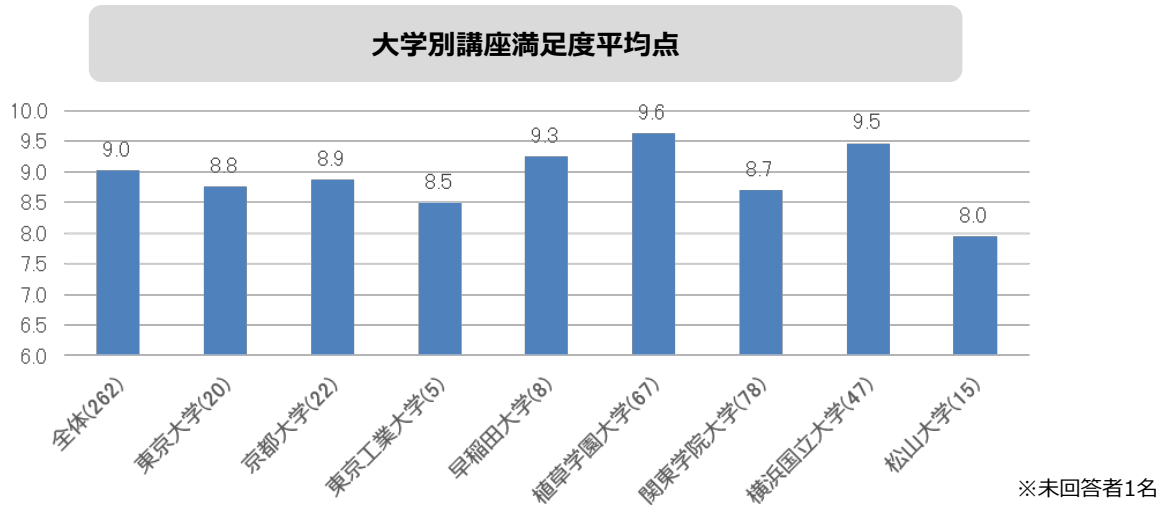


※未回答者1名

Ⅱ 各事業別の取り組み内容 | 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業

事業効果測定 | ① 講座参加者アンケート | 参加満足度とその理由

- ✓ 講座に対する満足度は10段階評価で全体平均で9.0点であり、かなり高い満足度であることが読み取れる。
- ✓ 特に植草学園大学、横浜国立大学での満足度が高い。これは、対話型の時間を多く取ったことによるものと推察される。

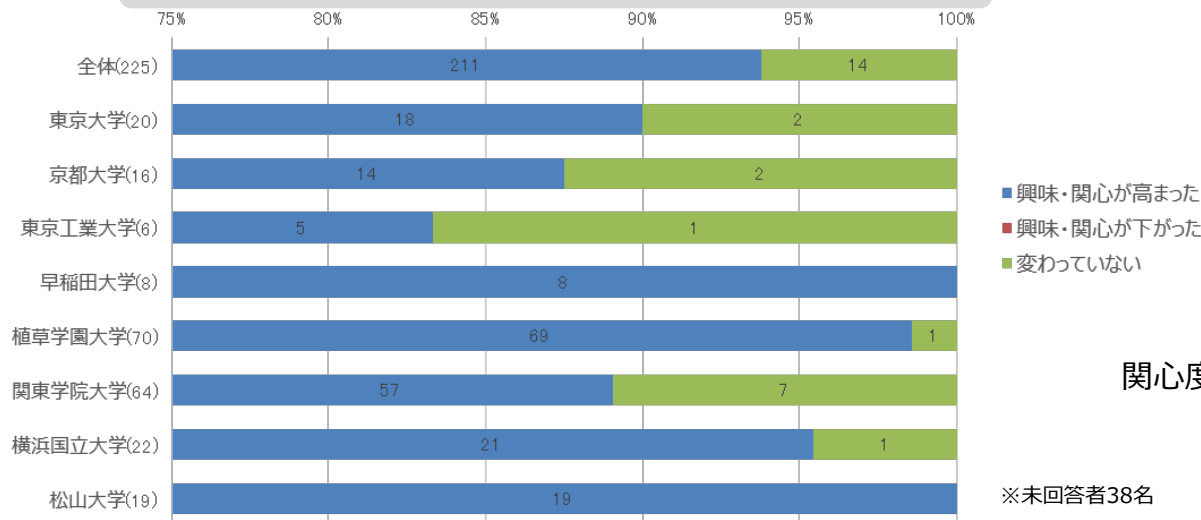


大学	属性	性別	満足度点数	自由記入欄（一部抜粋）
東京大学	学部3年	男性	10	✓生々しい話も含めて、一つ一つのストーリーに重みがあってよかった。
東京工業大学	学部3年	男性	10	✓障害者だけでなく自分とは違う人全てに対する向き合い方を考えるヒントになったから。
早稲田大学	その他（修士）	男性	10	✓当事者の言葉を直接聞ける機会があまりないので、貴重な講義でした。
植草学園大学	学部1年	その他	10	✓全てが当事者の言葉で出来た講義だったので、まさに障害者のリアルを知ることが出来たから。
植草学園大学	学部1年	男性	10	✓「自分のために生きていい」という自身を肯定してくれるそんなメッセージを感じとても自身に繋がり、とても勇気をもらえた講義だと感じたからです。
関東学院大学	40代	女性	10	✓自分の未知の情報を得られた。自分の人生観に変化を得られる気がする。
横浜国立大学	学部3年	男性	10	✓色んなことが新しかった。授業だということを忘れていた感覚になった。
横浜国立大学	その他（修士）	男性	10	✓コミュニケーションの意味を考えることができました。
京都大学	学部3年	男性	9	✓なかなか経験することのない当事者の方のお話を聞くことができてから。
早稲田大学	その他（修士）	女性	8	✓時間がちょっと短い
松山大学	50代	女性	7	✓いろいろなお話が聞いて良かったです。あまり参加できなかったことが残念でした。
関東学院大学	その他	男性	5	✓もう少し内容に入り込めるプログラムにできれば、理解と満足を得られたのでは？なぜ参加者交流ができないのでしょうか？多様な意見があるから多様性を考えられるのではないのでしょうか？

II 各事業別の取り組み内容 | 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業 事業効果測定 | ① 講座参加者アンケート | 興味・関心の変化

- ✓ 福祉や共生社会に関する興味・関心については、ほとんどの学生が「興味・関心が高まった」という回答している。

Q.福祉や共生社会に対する興味・関心の変化



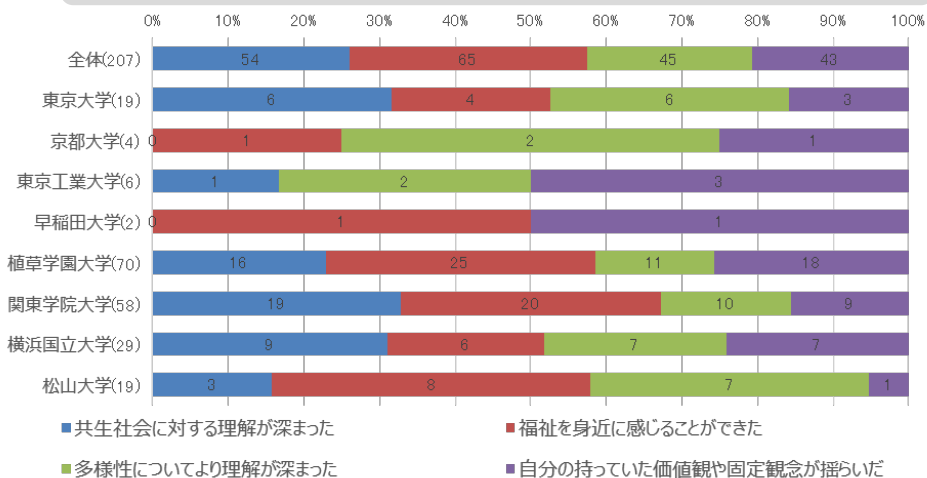
関心度変化の理由を教えてください。

大学	属性	性別	興味関心	自由記入欄 (一部抜粋)
東京大学	学部3年	男性	高まった	✓より良い社会に向けて互いの考えを考慮することの大切さを知ったから。
東京大学	学部4年	女性	高まった	✓卒業後に行政機関に勤める予定なので、自分ができることに何があるだろうかと考えるきっかけを頂きました。
京都大学	学部3年	男性	高まった	✓自分の知らないことを知ることができてより好奇心が湧いた
早稲田大学	その他(修士)	男性	高まった	✓「制度はつくるもの」。先生のこの言葉から、社会はほとんど作り変えていかなければならないものと思いました。
東京工業大学	その他	その他	高まった	✓障害に対して切実な現実を知ったから。
植草学園大学	学部1年	女性	高まった	✓今まではあまり興味が無かったけれど話を聞いてみると自分の知らない世界を知れて面白いと思った。
植草学園大学	学部1年	男性	変わっていない	✓元から福祉に関して関心があったからです。
関東学院大学	50代	女性	高まった	✓一人一人にスポットを当てる事で自分事として捉える事が出来た。
関東学院大学	学部3年	女性	高まった	✓実際にお話を聞いて、グループワークなどで知識を深められたから。
横浜国立大学	学部2年	男性	高まった	✓私がいざこの病気になったらどうなるんだろう、ということを考えることができました。 もちろん、近い人がそうなったら、ということも。
松山大学	学部2年	女性	高まった	✓実際に生きている今の気持ちを屋台主から聞くことができ興味深かった

事業効果測定 | ① 講座参加者アンケート | 講座を終えての感情 / 次回参加意欲

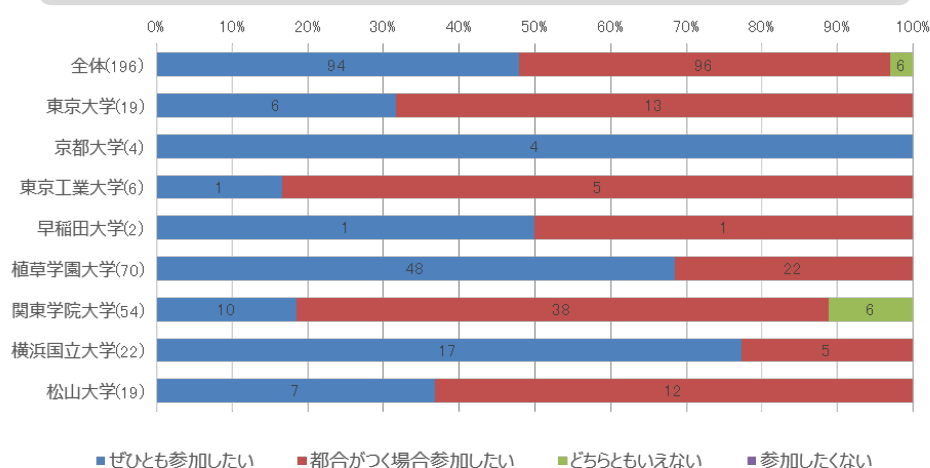
- ✓ 講座を終えての感情として、「福祉を身近に感じることができた」という回答が最も多かった。ただし、「共生社会に対する理解が深まった」「自分の持っていた価値観や固定観念が揺らいだ」「多様性についてより理解が深まった」という回答も一定数あった。
- ✓ 大学ごとに回答者数のばらつきはあるが、全体で見ると4つの選択肢に対し偏りなく回答が入っている。
- ✓ 次回講座への参加意欲は半数近い学生が「ぜひとも参加したい」と回答しており、「都合がつく場合は参加したい」も含めると、95%以上を占めている。

Q. 講座を終えての感情



※未回答者56名

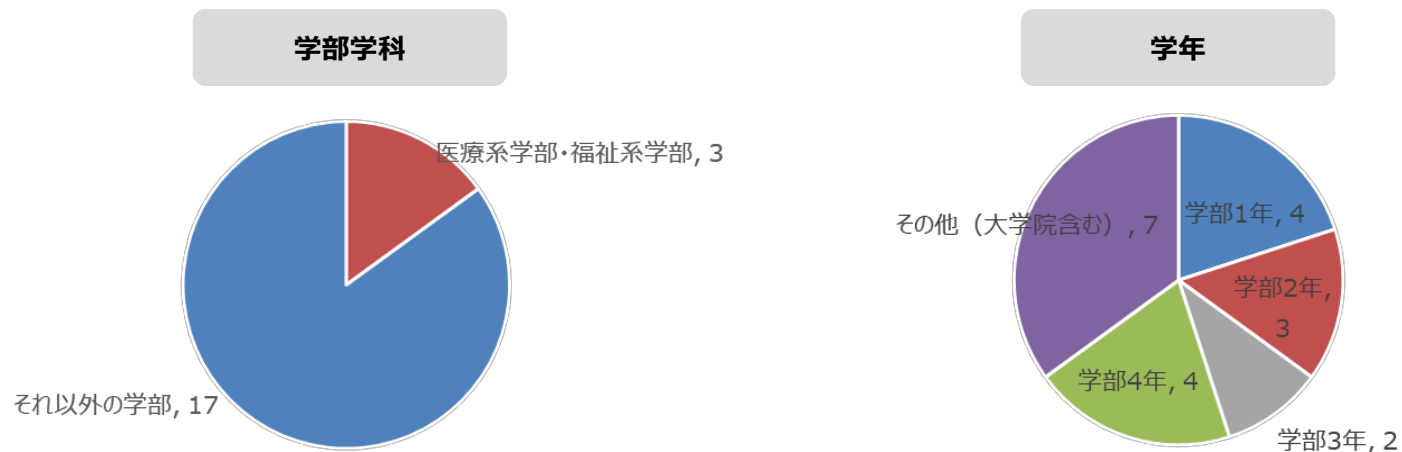
Q. 次回講座への参加意欲



※未回答者67名

事業効果測定 | ②運営学生アンケート結果 | 参加者属性／参加理由

- ✓ 医療や福祉系学部以外の学生の割合が高く、学部1年～大学院生まで幅広い学年の学生が運営に携わった。
- ✓ 参加動機は将来の就職を見据えてという回答が多かったが、本講座の扱うテーマそのものに問題意識を持っている方もいた。



Q.講座の運営に参加するに至った動機

- ✓ 将来福祉に関わる仕事に就きたいと考えており、そのための勉強を現在しているのですが、当事者の方のお話を聞く機会というのはなかなかありません。そんなときに縁あってこの講座で運営メンバーを募集していることを知り、生の声を聞ける滅多にないチャンスだと思い参加しました。自分たちで呼びたい講師を決めれることや、大学で初の取り組みで自分が好きなように動けるといった、ただ受講するだけでは経験できない運営のメリットにも惹かれました。
- ✓ 「今まで障害に触れてこなかった学生に、障害と向き合う機会を与える」という講座の趣旨を聞き、関心がある人に限らずにそのような機会をつくることの重要性を感じています。自身の通う大学の生徒にもその体験をしてほしいと考えたため、運営に参加させて頂きました。
- ✓ 特別支援の先生になる上でこのような経験は必ず役に立ち、いつか自分に活かせると思ったからです！

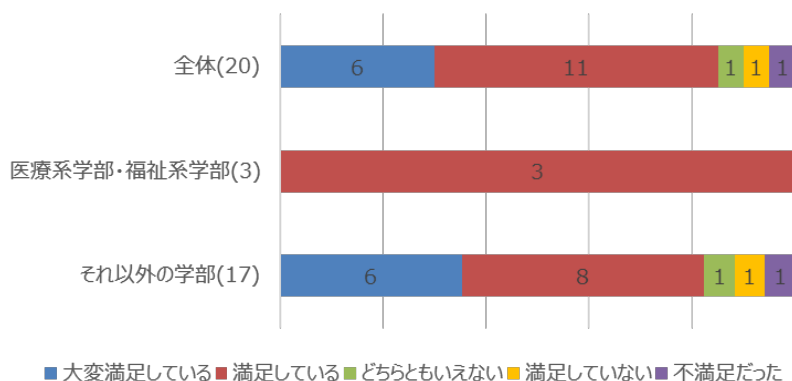
事業効果測定 | ②運営学生アンケート結果 | 参加前に抱いていた期待／満足度

- ✓ 運営に対する満足度を問う設問について、8割以上の学生が「満足している」以上の回答であることから、参加前に抱いていた期待を満たす、あるいは期待を上回る活動であったことが推察できる。

Q. 講義の運営に対して、期待していること

- ✓ 大学の授業を受けていると、どうしても理論や理想が先行してしまいます。そういったことも大切ですが、当事者の方が普段考えていることや直面している現実などを我々を含めた受講生に知ってもらいたいです。「障害者」というと、普段私たちが目にする機会が少ないこともあって何か特別な感じがするのですが、この講義をきっかけに、ひとりの人間なのだという認識が少しでも広がれば良いと思います。
- ✓ 福祉や障害といった分野にこれまであまり関心を持ってこなかった学生が、その後様々な分野で活躍する上で「福祉的な視線」を持ってくれること。
- ✓ 今回のプロジェクトが単発的なもので終わるのではなく、少しでも長く続き、多くの学生にゼミや障害、福祉について強く関心を持ってもらえることを期待しています。
- ✓ 実際に障害を持った人と話したり関わる機会が少なくリアルな話を聞ける事。

Q. 講座運営に対する満足度



Q. 授業満足度でつけた点数の理由

- ✓ 講師を決めるための話し合いや、講師と打ち合わせは、非常に学びが多かった。
- ✓ 「大変満足」にしなかったのは（半ば仕方ありませんが）事務作業の多さによって、「当事者と出会う」場作りの楽しみやそれへのやる気が削がれていった人が一部いたから。
- ✓ 企画の主旨に沿って当事者と非当事者関わらずタブーなく意見が交わされていたことが大変刺激的で、日々の生活でも福祉などの話題に一層注意を向け考えるようになったため。

事業効果測定 | ③運営教員アンケート結果 | 満足度／効果実感等

- ✓ 運営にご協力いただいた京都大学村田先生、松山大学黒田先生、関東学院大学照沼先生、横浜国立大学樽沼先生にアンケートの回答をいただいた。

参加満足度 (5段階)	その理由
5大変満足している	素晴らしいゲストたちと参加者たちが有形無形の遭遇と交流をする時空を創り出してくれたから。
5大変満足している	DOORの協力により、これまでの大学の授業の常識、思い込みのような枠を超えられたから。
4満足している	企画、運営に手探り感が強かったが、スタッフ間の十分な協議と協力で開催した講座は想定以上か同等に成果があった。しかしながら新型コロナウイルスの影響で講座の後半3回分が開催困難となり、ワークショップを実施できず、受講生とりわけ学生の成果（成長）を確認できる機会がなくなってしまったため。
3どちらともいえない	本事業を主催されている方への評価ではなく、私自身の役割？に対する評価です。理由としては、そもそも顧問？という位置づけや役割、責任などが十分理解できておらず、本件が「厚労省補助事業」であるということの仕組みなども理解できておりませんでした。企画がどんどん進むなかで、必要な確認ができないまま終了を迎えたので、その点を反省しております。

■ 自身の福祉への印象変化

- ✓ ゲストたちとの交流は人間の生きかたの結晶を知ることであり、学ぶべきことの先端を見せてくれると当初から考えていた。本講座によって、その思念が実感に変化したと思う。
- ✓ 福祉の印象が明るく広がり、創造的なアイデアを考えられるようになった。

■ イベントの参加背景

- ✓ 「障害」と「健常」、「異常」と「正常」、「マイノリティ」と「マジョリティ」の区分やヒエラルキーを、実感として書き換える影響や効果があると思う。「福祉」のイメージも更新される必要を感じ取るのではないか。
- ✓ 日頃の授業では寝てしまうような学生も、真剣に当事者の方の話を傾聴できて、気持ちに変化が生まれていた。これまで地域でマイノリティと思われる人の語りは、説得力（影響力）があり、受講生が人生について考える力となった。

1. 8大学延べ1,554名の参加により、多くの大学生に対して福祉の理解を促すことができ、高い満足度を得た

- ✓ 東京大学以外の7大学が開催初年度の中、ポスターやTwitter等で計画的に広報を実施し、延べ1,554名、1大学平均194名が参加した。
- ✓ 当事者のリアルに迫るというコンセプト通り、アンケートでは当事者の話を赤裸々に聞いたという声が多く挙げられ、参加者の高い満足を得ることができた。

2. 他の魅力発信事業との連携により、コンテンツ化を図ることができた

- ✓ 他の事業と連携し、相互に広報を行うことができた。具体的には、好事例を介護論考集に読み物としてまとめメディア化することで、講座に参加していない多くの人に伝えることができた。また、非福祉系大学生向け福祉出会い創出事業へのイベント参加をアナウンスし連動させることで、受講した学生に芽生えた興味関心を就職活動に繋げていく道を作ることができた。こうした事業間の連携も広報の形の1つだと考え、福祉に足を踏み入れる学生の母数を増やすために、興味関心の入り口としての機能を拡充していく。

3. 運営方法により大学間で満足度に違いが出たため効果的な運営方法を主体的に提言する

- ✓ 学生独自に運営する自主ゼミとして運営する方法、大学既定の授業枠に組み込む方法、公開講座として社会人も招く方法など、大学ごとに運営方法が異なる中今年度は講座を実施した。
- ✓ 各大学の特性や担当教授の専攻・専門性を生かし講座の構成を考えた。実施してみてもの仮説として、大学ごとに満足度の差が生まれたのは運営手法であったことが挙げられる。例えば、参加人数が多い講座構成では参加者と当事者との間に距離が開き、「リアルに迫る対話」を作り出す難しさが生じてしまった。当事者との関係、開催する場所や空間、最適な人数をあらかじめ想定する必要がある。
- ✓ こうした適切な運営方法の模索や、対話型ゼミのコンセプトに基づいた環境や空間を設計することが今後の課題であると考えられる。満足度や学生の出席率の向上のために、運営方法を主体的に提言していく。

4. 単年度での取り組みとせず、継続的な実施による福祉への理解を高めていく

- ✓ 東京大学以外は今年度が初めての取り組みで試行錯誤の状態である。運営の形も教授主導や学生主導など多岐にわたっている。それぞれの授業の目的と照らし合わせ、最適な形を数年かけて模索することが必要であり、そのためには継続して開催し続けることが重要である。
- ✓ また、継続して開催することで、学内での認知度向上につながり、福祉に興味を持つ学生が増えることが期待される。

I 若年層向け魅力発信事業について

II 各事業別の取り組み内容

- 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業
- 2 福祉・介護BOOK制作出版事業
- 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業
- 4 **中高生と大学生のピアエデュケーション事業**
- 5 アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業

III 全体総括

事業の全体像

●事業の目的

- ・ 福祉・介護を学んでいる大学生が、中学・高校へ出向き、福祉の魅力を伝えることで、福祉に興味を持ってもらう。
- ・ ピアエデュケーションという形態をとることで、中高生の目に映る大学生は身近で魅力的なロールモデルとなり、「福祉を学ぶこと」「福祉で働くこと」の魅力が伝わりやすくなる。

●実施内容

- ・ 本事業では、20名の大学生が中学高校計9校で福祉教育の授業を行った。

開催校	旭川東 高校	旭川商業 高校	旭川龍谷 高校	札幌新陽 高校	当別高校	海星学院 高校	登別明日 中等教育学校	札幌飛鳥 未来高校	大正北 中学校
進路 傾向	進学中心	進学就職 半々	進学就職 半々	就職多	就職多	進学就職 半々	中高一貫	通信制	—
実施日	11/22	12/11	11/22・12/11・ 12/28	1/8	1/22・ 1/23	12/17	2/4	12/16	11/29

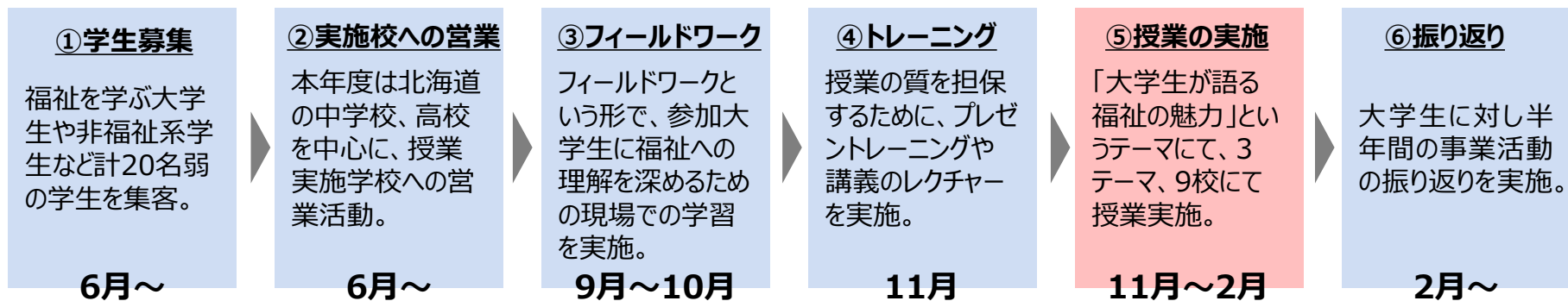
●効果測定の方法

- ・ 中学校、高校での授業

対象	①授業に参加した中学生・高校生	②中学校・高校の担当教員	③授業を行った大学生
内容	・参加満足度 ・福祉に対するイメージ ・ピアエデュケーションについて 等	・授業満足度 ・福祉に対するイメージ 等	・参加満足度 ・学びや印象の変化 ・ピアエデュケーションについて 等
手法	紙面によるアンケートでの回答	紙面によるアンケートでの回答	Webアンケートでの回答

事業概要図

✓ 本業務は以下の通り進めた。



- ※ 福祉教育を行う大学生には、事前に3回程度の事前授業、現場視察やフィールドワークなど、授業に向けた準備を入念に行った。学生層に合った授業を行うために、学校の偏差値や就職実績により、授業テーマや構成を変えている。
- ※ ③において、福祉を専攻していない学生に対してはフィールドワークの前に福祉を座学で学ぶ研修を実施した。
- ※ ⑤授業の実施においては、すべての授業で大学生が講師に立つというわけではなく、講師のフォローに入る形もある。(詳細はP48)
- ※ ⑥大学生は中学高校での授業後も事後学習として振り返りを行い、知識や技術の定着と継続した学びへの意欲向上につなげる。

●フィールドワークについて

- ・実施日：10月5日（土）
- ・実施内容：「当事者のリアル」
発達障害当事者×支援者の講話
質疑応答
- ・参加大学生数：7名



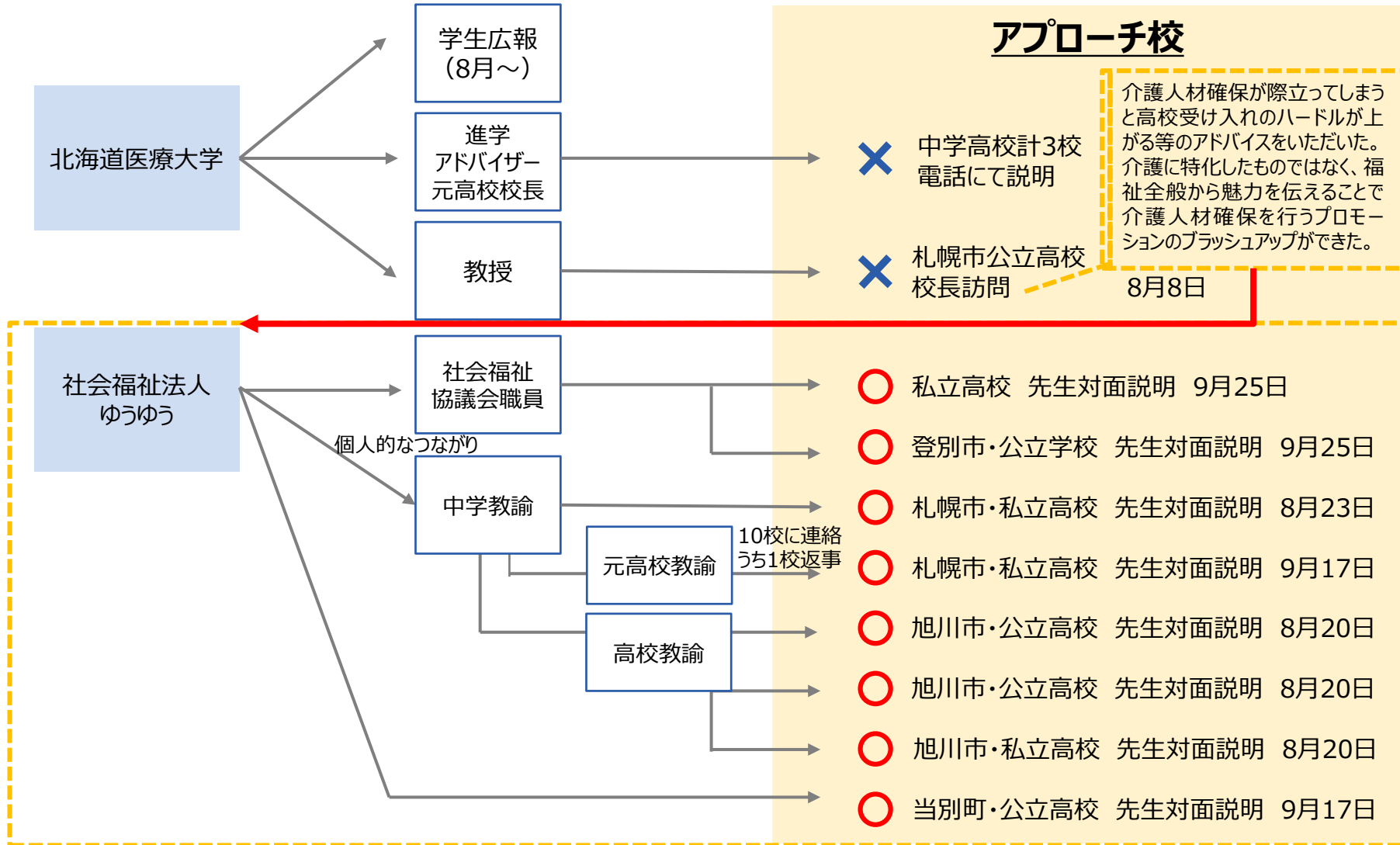
●トレーニングについて

- ・実施日：9月7日（土）、10月26日（土）他
- ・実施内容：福祉の魅力を考える
福祉教育プログラムを考える
プレゼン練習
- ・参加大学生数：9名



事業内容詳細 | 福祉教育実施校へのアプローチ

- ✓ 社会福祉法人の職員の個人的なつながりなど、インフォーマルな繋がりを利用してアプローチした。
- ✓ 校長先生からいただいた意見を踏まえ、9月以降は学校での学びに紐付けた営業を行うことで営業先学校に魅力を発信した。



事業内容詳細 | テーマ別授業分類

✓ 講義は、学校の特徴に応じて3分類で実施した。

テーマ	共生社会と私	当事者のリアル	大学生が伝える福祉の魅力
学校種別	進学校中心	就職校や中堅校が中心	就職校や中堅校が中心
進学実績	大半が大学進学	就職・進学は半々	就職・進学は半々
実施のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・人口動態やこれからの社会の変容を提示し、自分自身への影響を考えてもらった。 ・福祉の実践と社会課題の解決がどう繋がっているのかを共有した。 ・これからの社会や人生で、関心のあるテーマや、自身が行動できることを考えてもらった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者本人と、関わりのある支援員と一緒に登壇し、インタビュー形式で実施した。 ・当事者本人と支援員がいつも通り接することで当事者との関わり方のモデルを体感してもらった。 ・当事者の生育歴に加え、日々の生活の中での困りごとを支援員に話してもらい、障害特性や関わる上でのポイントを説明した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生の自己紹介など、アイスブレイクをしっかり行い、生徒との関係性構築を丁寧に行った。 ・大学生自身の福祉を志すきっかけや、進学を決めるまでの物語を噛み砕いて話してもらい、多様なきっかけが福祉の入り口となることを伝えた。
大学生の関わり方	見学／運営サポート／参加無	見学／運営サポート／参加無	大学生がストーリーテラーとなる
実施校	旭川東高校 旭川龍谷高校 海星学院高校 登別明日中等教育学校 札幌新陽高校 5校7コマ	旭川商業高校 旭川龍谷高校 2校2コマ	当別高校 札幌飛鳥未来高校 大正北中学校 3校4コマ

✓ テーマに関わらず、グループワークや質疑応答を取り入れることで学生との対話の時間を多くとった。

✓ レクチャー、講義の時間を枠の半分程度に抑え、コミュニケーションを活発に行った。

事業内容詳細 | 共生社会と私（旭川東高校の例）

- ✓ 旭川東高校では社会福祉法人ゆうゆうの大原理事長が登壇し、地域共生社会と私というテーマで授業を開催した。



実施校	旭川東高校		
実施日時	11月22日（金） 15時40分～17時10分	実施枠回数	1回
実施テーマ	地域共生社会と私 ～これからの社会と私の関わり～	開催場所	学びのフロア （放課後の自主勉強会）
実施の狙い	これからの社会を知り、 自分の関わりを考える	参加人数	約30人
登壇講師	大原裕介氏 （社会福祉法人ゆうゆう理事長）		
実施内容 タイムテーブル	5分	●オリエンテーション+ 事前アンケートの記入 ・授業実施の背景共有、自己紹介、今日の流れの説明、アンケート記入	
	50分	●地域共生社会を考える～これからの社会と私～ ・前社会の変化と社会保障や福祉の役割 ・社会・地域をデザインする福祉の新しい実践について	
	10分	●質疑応答	
	15分	●振り返り記入5分&グループ共有10分 ・シート記入 感想・印象に残ったこと 福祉の仕事のイメージの変化（BEFORE→AFTER） これからの社会で自分が担いたい役割 ・小グループで共有	

II 各事業別の取り組み内容 | 4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業 事業内容詳細 | 当事者のリアル (旭川商業高校の例)

- ✓ 旭川商業高校では社会福祉法人ゆうゆうの大原理事長と当別町在住のゆうゆうの利用者のK場さんの対談によって、当事者のリアルや福祉現場のリアルを考える時間を形つかった。



実施校	旭川商業高校		
実施日時	12月11日 (水) 15時40分～17時00分	実施枠回数	1回
実施テーマ	当事者のリアル 福祉現場のリアル	開催場所	本物塾 (放課後の自主勉強会)
実施の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な価値観・生き方に触れる ・人を支える仕事の魅力を知る 	参加人数	約20人
登壇講師	大原氏 (社会福祉法人ゆうゆう理事長) K場さん (当別町在住のゆうゆう利用者)		
実施内容 タイムテーブル	5分	<ul style="list-style-type: none"> ●オリエンテーション ・授業実施の背景共有、自己紹介、今日の流れの説明 	
	25分	<ul style="list-style-type: none"> ●K場さん×大原氏トークセッション ・自己紹介 (5分) ・中学校の頃、障害の気付き (5分) ・高校の頃 (5分) ・当別でゆうゆうに出会って (5分) ・今伝えたいこと、メッセージ (5分) 	
	20分	<ul style="list-style-type: none"> ●大原氏福祉のキッカケ (太一君の話) ●東高の話 (20分) 	
	20分	●質疑応答	

事業内容詳細 | 大学生が伝える福祉の魅力（当別高校の例）

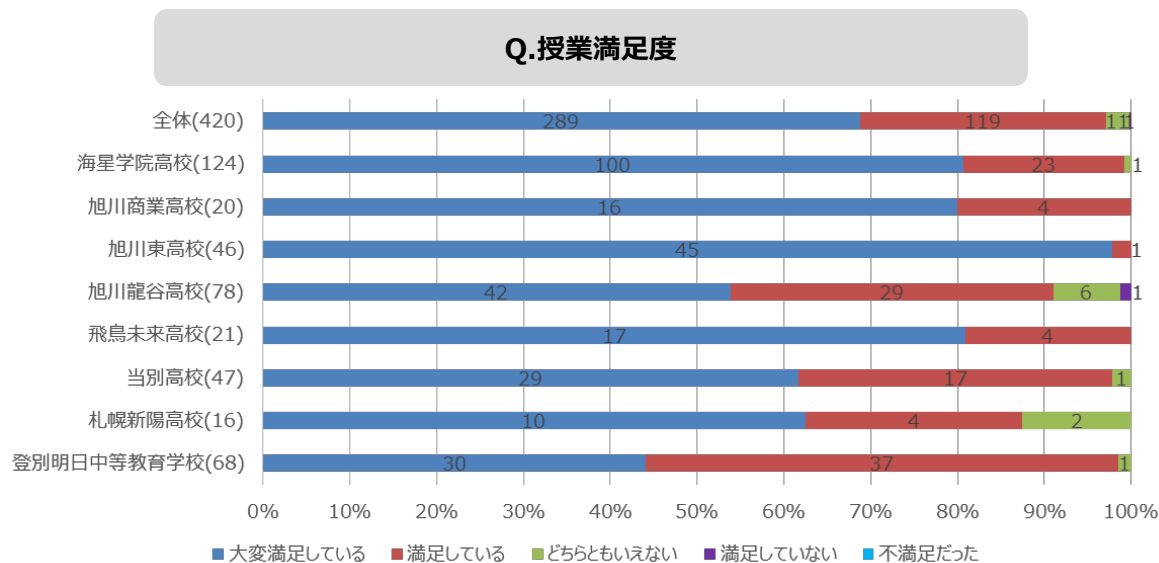
- ✓ 当別高校では大学生がストーリーテラーとなり、福祉の魅力を語った。



実施校	当別高校		
実施日時	1月22日（水） 23日（木） それぞれ50分	実施枠回数	2回
実施テーマ	大学生が伝える福祉の魅力	対象学生	家庭科の学生
実施の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・多様なキッカケからのキャリアの描き方を知る ・福祉のイメージを広げる 	参加人数	約50人
登壇講師	北海道医療大学の大学生6名（ピアエデュケーションの形態）		
実施内容 タイムテーブル	5分	<ul style="list-style-type: none"> ●オリエンテーション ・趣旨及び今日の流れの説明、主催者の自己紹介、アンケート 	
	5分	●「福祉」って聞いて思い浮かぶ言葉リレー	
	10分	<ul style="list-style-type: none"> ●大学生が語る福祉と私のストーリー（グループワーク） ・自己紹介・福祉に関心持ったキッカケ ・なぜ福祉の学部に入ったか 学んでわかった福祉の魅力や可能性 ・これからの夢 	
	10分	●感想＋質疑応答	
	10分	<ul style="list-style-type: none"> ●改めて「福祉」って聞いて思い浮かぶこと ・シートの記入→共有 	
	5分	<ul style="list-style-type: none"> ●まとめ ・ゆうゆう職員萩原氏が総括 	

事業効果測定 | ① 中高生アンケート | 授業満足度とその理由

- ✓ 授業満足度はおよそ97%の方が、「満足している」と回答したことから、中高生にとって満足度が高いものであったことが推定できる。
- ✓ 中高生が福祉に関するキャリア教育を受ける機会は少ないと予想されるため、介護人材確保の上でより広範囲にて行うことが重要であると考えられる。



※ 八軒東中学校、札幌みなみの杜高等支援学校の生徒の回答分は、授業を受けた札幌新陽高等学校の回答にカウントされている。

Q.満足度の理由

- ✓ 福祉に対するイメージが明るくなって、絶対にしたくない職業だと思っていたのが、少し興味を持てるようになりました。
- ✓ 福祉に対するマイナスなイメージが払拭された。
- ✓ これからの日本では自主的に動かなきゃいけないことを学べて良かったからです。
- ✓ 大原さんの人生観に触れる事ができ、また少し自分の中の世界が広がった実感があったから。
- ✓ 感想が少しずつに浮かんできたので、新しいモノの見方に触れられたのかな？と思った。
- ✓ 今の自分に足りないところや欠点を明確化していただいて、これからの社会の在り方とともに自分の将来像のイメージがふくらんだから

事業効果測定 | ① 中高生アンケート | 授業前後の福祉に対するイメージの変化

- ✓ 授業前は低賃金や重労働などのマイナスな印象や、自分とは遠い存在、職という回答が目立った。
- ✓ 授業後は前向きな回答が多く見られ、「福祉」という言葉をより身近に捉えてもらうことができた。

Q.福祉に対する印象（授業前）

- ✓ 自分から進んでやりたいと思える仕事ではなかった。
- ✓ だるそう、眠たい、汚い、低賃金、すすんで働きたくない。
- ✓ 大変そうで、できれば関わりたくない。
- ✓ 自分がしなくても誰かがどこかでやってくれるもの。
- ✓ 若者が高齢者や障害者を支えるもの、なければならぬもの。

授業前後の“福祉”に対するイメージの変容

Q.福祉に対する印象（授業後）

- ✓ 福祉という印象ががらりと変わった。福祉の可能性というのを感じ、こんなにもいろんな人が輝ける場所をつくれるなんて素晴らしいと思った。
- ✓ もちろん大変だし、汚い仕事もあるけれど、それ以上に楽しいこともあり、「福祉」という言葉が明るく聞こえた気がします。
- ✓ 奥が深すぎることに気づき、一人ひとりが認めることが重要であることが分かった。
- ✓ 自分自身に何ができるのかを考えて行動することで、福祉の問題が解決の一步となるという小さな変化が、大きな変化をもたらす。
- ✓ 福祉に関わりたい、自分で変えたいと思考が変化したから。

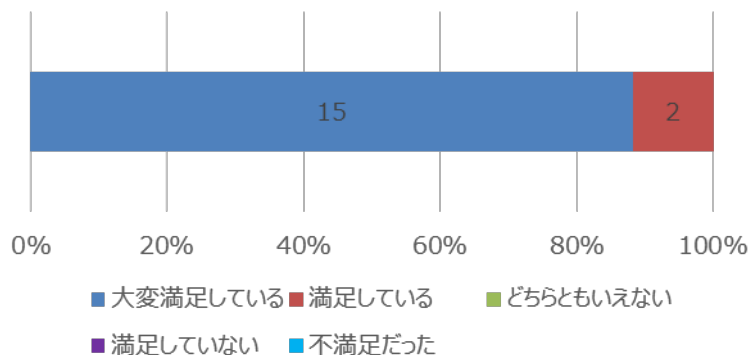
自由記載欄の抜粋（介護人材確保に関して）

- ✓ 障害や福祉に関して、これから学んでいこうと思う。
- ✓ もっと福祉について知りたいと思ったし、今日の授業を受けて自分も福祉関係の仕事に就きたいと思った。
- ✓ 将来どうなっていくのかとか、福祉の仕事ってやっぱり難しいんだなと思ったし、なおさらやりたいと思った。

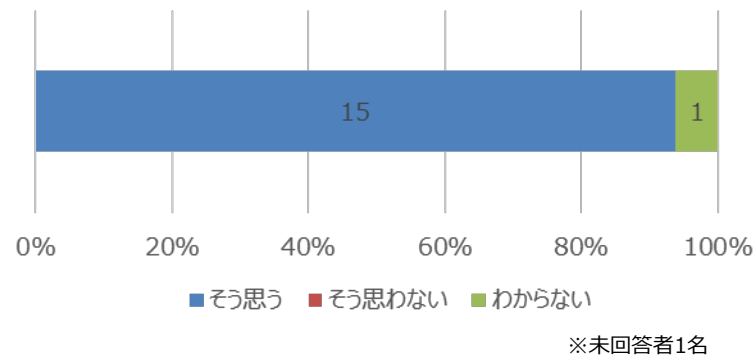
事業効果測定 | ②教員アンケート | 授業満足度と効果の実感

- ✓ 教員の満足度は軒並み高い結果で、生徒にとっても学びのあるものと受け取れる結果が得られた。
- ✓ 「授業前後における生徒の雰囲気、表情の変化を実感できた」と日頃から生徒をよく知る教員の多くが回答していることから、本授業が生徒に与える影響が大きなものであったことが確認できる。

Q.授業満足度



Q.福祉関係者や大学生による福祉教育が
生徒にとって学びがあると思うか。



Q.満足度の理由

- ✓ 人として大切な支え合いや優しさ、寄り添うといったことを生の声で聴くことができたからです。
- ✓ 職員⇒利用者(障害者)という一方からのかわりではなく、相互関係を持ち、それが企業・会社経営に結び付くという本質的なことを学ぶ機会だったから。
- ✓ 一方的に話を聞いて終わるのではなく、自身の背景と重ね合わせながら、とても共感できることがあった。また、これからの日本社会の中で、一人ひとりが考え、ひとつでも実践すべき気づきがあった。
- ✓ 生徒たちの雰囲気、表情がどんどん変化し、生徒たち自身が講演を聞く前と後で変化を実感できていたこと。

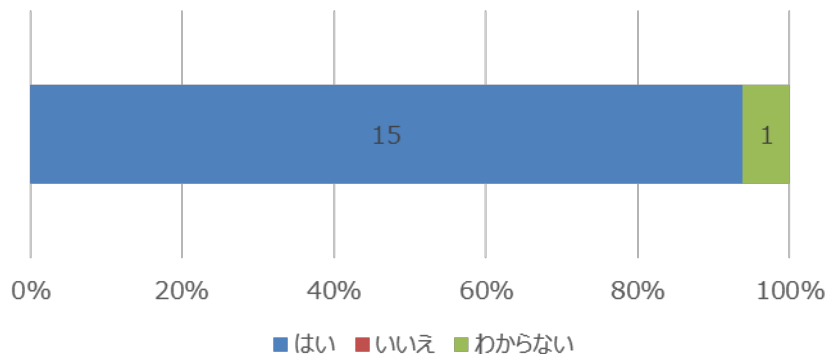
II 各事業別の取り組み内容 | 4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業 事業効果測定 | ②教員アンケート | 福祉への印象変化等

- ✓ 担当教員自身の福祉に対するイメージの変化や、本事業の継続実施意向について質問した。
- ✓ 福祉を専門としていない方が大半を占めていたため、ご自身が持つ福祉の印象と実態との間に乖離があるという回答を多くの方がしていた。
- ✓ 今後も同様の授業を実施したいかを問う設問では「はい」が9割を占めたことから、生徒にとって、更には自身にとっても意義深い授業であったことが推察できる。

Q.自身が持つ福祉に対する印象変化

- ✓ 介護などの仕事だけではないことはわかりながらも福祉のイメージは介助サービスと考えていました。人を大切にする仕事だと感じることができました。
- ✓ 福祉に関して明るい印象を持ったが、現実の現場とのギャップがあるような気がした。社会での福祉の印象を変えていくには、このような授業が必要不可欠と感じた。

Q.今後もこのような機会があれば授業を実施したいか



※未回答者1名

Q.左記の理由

- ✓ 多くの人を知り、互いに認め合える社会が、世の中を変えてゆけると感じたから。
- ✓ ワークショップ等を通じて主体性を持ちつつ考えを深めることができたと思います。実際に行動を起されている方のパワー溢れる言葉で生徒も勇気づけられたと思います。
- ✓ 少子高齢化の中で、福祉の理解は必要不可欠であると思うので。
- ✓ 障害をもった方のお話を聞く機会は、ほとんどありません。生徒も今後の人との関わりについて、とても勉強になったと思います。

事業効果測定 | ③運営大学生アンケート | 参加者属性 / 参加理由

- ✓ 参加大学生の属性については以下のようになる。
 - 参加大学生数
20名
 - 大学生内訳
男性13名 / 女性7名
福祉系学部14名 / その他学部6名



Q.本事業への参加目的や動機

- ✓ 以前から教育分野に関心があり、実際の教育現場について学びたかった。
- ✓ 地域に向けた取り組みに興味があったから。
- ✓ 1年生で大原さんの授業をきき、大原さんの授業をうけてみたくなったため。
- ✓ 福祉を実際的に学びたいと思ったから。

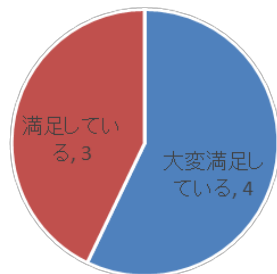
Q.本事業を通して学びたいこと

- ✓ 地域のつながり という漠然としたものをどういう風にしていくか。
- ✓ 目の前のひとりに伝えていくということは地域福祉システムを作っていくための土台の部分だと思うので、その実現のための手段を個人的に模索していきたい。
- ✓ 中高生が持つ福祉のイメージを知りたい。

事業効果測定 | ③大学生アンケート | 参加満足度／学びや印象変化

- ✓ 回答者の全ての方が「満足している」以上の回答であったため、参加満足度は高いものであったといえる。
- ✓ 参加者の志望業界を問う設問では、「福祉業界を考えている」が3名、「多くの選択肢の中に、福祉業界も含まれている」が4名と、参加者の大半が福祉職への就職を検討していることがわかった。職業選択への影響が確認できる。
- ✓ 振り返りでは、「改めて福祉が好きなんだという気持ちに気づいた。やっぱり福祉の仕事をしたと思う」など、福祉への就業意欲の高いコメントも多く得られた。

Q.授業の参加満足度



- 大変満足している
- 満足している
- どちらともいえない
- 満足していない
- 不満だった

Q.左記の理由

- ✓ 実際の教育現場での福祉の捉えられ方や子供の生活のリアルを感じられた
- ✓ 中高生の空気感を知ることができたから
- ✓ 実際に身を寄せて現場というものから様々なことを感じられたから
- ✓ 箇所の福祉教育を通して、自分なりの福祉の魅力を相手の立場に合わせて伝えるということを学ぶことができた。
- ✓ 福祉の魅力を伝えきれたかは、わからないが自分の実力を知ることができた

Q.福祉職への印象変化や、事業を通じた学び

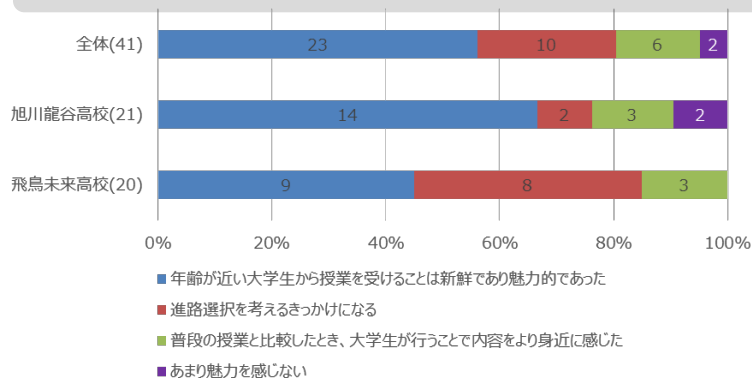
- ✓ 座学よりも、実践を通じたほうが自己覚知ができると感じた。失敗をふまえて、次に活かす、今後の授業に活かすことができると感じた。
- ✓ 実践によって、当事者の生の声や、支援者、関係者の思いがダイレクトに伝わると感じた。
- ✓ 福祉は介護という意識が根強い「ニーズの発端は1人の当事者から」ということを再確認できた。
- ✓ 福祉は、支援するだけじゃないものだと改めて気づいた。
- ✓ 発信する魅力や、アートとのつながりも自分の興味や思いで幅広くすることができることを学んだ。私自身は変わっていません。特に変化はしていない。

事業効果測定 | ①③ピアエデュケーションに対する中高生・大学生の反応

- ✓ ピアエデュケーションに関して、大学生側と中高生側のそれぞれの視点を確認した。
- ✓ 中高生側は、大学生から受ける授業は新鮮・魅力的であり、進路選択を考えるきっかけになると回答した。
- ✓ 大学生側は、就職していない立場であることが中高生にとって福祉を身近なものとして感じてもらいやすい、と回答した。

中高生

Q.大学生から授業を受けることをどう感じたか



感想

- ✓ 大学生の方の話し方は本当に上手で私たちにわかりやすく説明するためにパワーポイントにまとめて下さったり、アイコンタクトをとったり、どう思う？かとかも聞きながら話してくれたので、すごく楽しく講座を受けられました。ありがとうございました。
- ✓ 最高に楽しい授業でした。ありがとうございました。

大学生

Q.中高生に福祉の魅力を伝える上で必要なこと

- ✓ ネガティブなことでも本当のことを伝えること。
- ✓ 自分の言葉で伝えること 福祉は身近なものであると気づかせること。
- ✓ 中高生の状況に応じた発信力と、自分自身が福祉を魅力的だと感じる学びを得ること。

Q.大学生が中高生への福祉教育を行うことの一番の効果

- ✓ 大人とは違った角度から子どもにメッセージを伝えることができる。
- ✓ 年齢が近いため、萎縮せずに話し合うことができる点。
- ✓ 専門分野で働いていない、まだ就職していない「学んでいる」「これから将来を考えてる」という高校生とある意味似たような立場で伝えることができる。
- ✓ 高校生の生のフィードバックがあることで大学生自体が現場に出る前に自己肯定の根拠を得ることが出来る。

事業総括と今後の課題

1. ピアエデュケーション等の福祉教育によって、福祉のイメージアップ・魅力発信の成果が見られた

- ✓ 定性データ・定量データの双方から、大学生が中高生に福祉の魅力を発信することがもたらす効果を確認することができた。ピアエデュケーションの反応を問うP58の回答からも、中高生に対する福祉教育の効果効能を大学生が自身の文脈で語る事ができている。

2. 授業テーマを3タイプから選択してもらうことで、開催初年度ながら9校で実施し、満足度も高いものになった

- ✓ 実施先学校のタイプに合わせてプログラムを提供したが、理解度や満足度はいずれも高く、普遍性の高いプログラム開発ができたといえる。
- ✓ 校長先生からのアドバイスをもとに、学校での学びに紐付けた営業を行うことで営業先学校に魅力を発信できた。

3. 中高生の具体的な進路・進学に対して影響を与えるために、持続的なプログラム提供体制を確立する

- ✓ 具体的な進路・進学への影響を強めるためには、高校1・2年生への授業が好ましいが、単年度事業ということもあり、高校等へのアプローチが偶発的かつ授業実施枠の確保が限定的となってしまう。今後継続的なアプローチができるよう取り組みを体系化できるとより効果的なタイミングでの授業実施が可能となる。
- ✓ 開催プログラムを多様化・継続化し、福祉教育の実績を積み上げることで、早期からの学校のカリキュラムへの組み込みを狙う。

4. 大学への連携強化により、協働性の向上と福祉系大学生へのカリキュラムを充実させる

- ✓ フィールドワークやトレーニングを通じて福祉の理解や技術の向上につながったと回答していることから、フィールドワークやトレーニングを含む今年度実施のカリキュラムは満足度が高いものであったことが予想できる。
- ✓ 大学生への変容をより促進するためには、継続的な関わりや授業実施の機会があるとより好ましい。
- ✓ 大学との連携強化を考える上では、大学側からも主体的に関われる体制構築が必要となる。本年度の結果を踏まえて議論を重ね、来年度の大学との関わり方を再度見直していく。

I 若年層向け魅力発信事業について

II 各事業別の取り組み内容

- 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業
- 2 福祉・介護BOOK制作出版事業
- 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業
- 4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業
- 5 **アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業**

III 全体総括

事業の全体像

●事業の目的

- これから日本の福祉現場で働くことを予定しているアジア圏の若者に対して、日本の介護情報・生活情報を正しくわかりやすく伝えるwebサイトを制作することで、日本で働くことに対する不安の解消を図る。
- 「やさしい日本語」を基本としつつ、英語、日本語のwebサイトを制作することにより、アジア圏の若者にとってわかりやすい内容とする。

●実施内容

- webサイトは日本語を学習し、日本への渡航を考えている若者をターゲットとするため、「やさしい日本語」、日本語、英語の三言語で閲覧できるものとし、3月25日（水）に公開した（<https://www.kaigo-in-japan.jp>）（英語版は4月下旬公開）
- webサイトの構築にあたり、アジア圏の視察を実施（10/17-10/26）。インドネシア・カンボジア・ミャンマーの3カ国を周り、編集者・クリエイターらが中心となり、生活の実態や若者の思考についてインタビューを行った。

●効果測定の方法

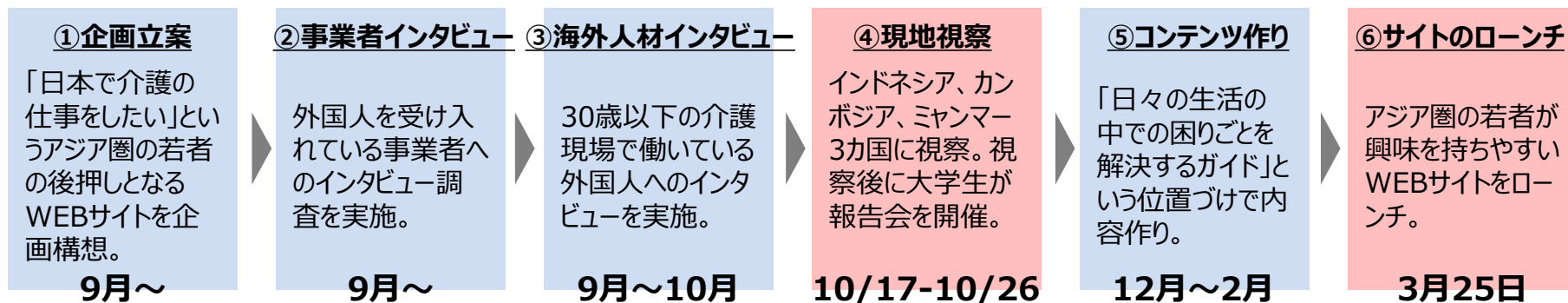
対象：日本で働く外国人、日本で働くことを予定している日本語を学ぶ外国人

内容：webサイトを見た上での印象 等

手法：webアンケートによる調査

事業概要図

✓ 本業務は以下の通り進めた。



✓ ③では、介護現場で働いている海外人材に対してインタビューを行い、来日する際に参考にしたwebサイト等について確認した。

✓ ④では、現地言語を学ぶ日本人大学生が同行し視察を行った。帰国後に大学生は学内で勉強会を開催し、現在の海外人材の受け入れ実態などを報告し、情報発信を行った。

✓ ⑥では、3月25日（水）に「KAIGO in JAPAN」のwebサイトを公開した。

事業内容詳細 | 海外視察後の報告会

- ✓ 視察に行った3名の大学生は日本帰国後、所属大学にて社会福祉法人福祉楽団と協働で報告会を開催した。
- ✓ 報告会では、外国からの介護人材の受け入れをテーマに、問題意識を共有する場とした。

●企画名

・「福祉と介護を語る夜」

●開催の意義、目的

- ・アジアツアーについての報告会を行い、福祉や介護を取り巻く現状について、参加者と問題意識を共有する。
- ・「外国からの介護人材の受入」というテーマを含めた、日本の福祉・介護の今後について、立場の違う参加者が垣根を超えて議論する。

●詳細

- ・日時 : 1/29(水) 18:00-20:00
- ・参加者 : 福祉楽団、東京外国語大学中山ゼミ有志 10数名、ほか学生数名

報告会の様子



現地の若者の声

●生活のための労働

・「家族を支えたい」「自分が日本で稼ぐ給料の半分を毎月親に送りたい」「3年で150万円貯金したい」(学生・インドネシア)

●介護に対する関心

・「留学して介護福祉士になりたい」「お年寄りのケアに興味がある」(学生・インドネシア)

●日本への関心の高さ

・「日本の文化が好き」「日本に行くことが自分の将来に役に立つ」(カンボジア・学生)

現地の教育体制における問題点

●生徒にはどうすることもできない、教育機関による差が存在する。

・教育水準の差、出会う日本人の差

●ハード面による勧誘

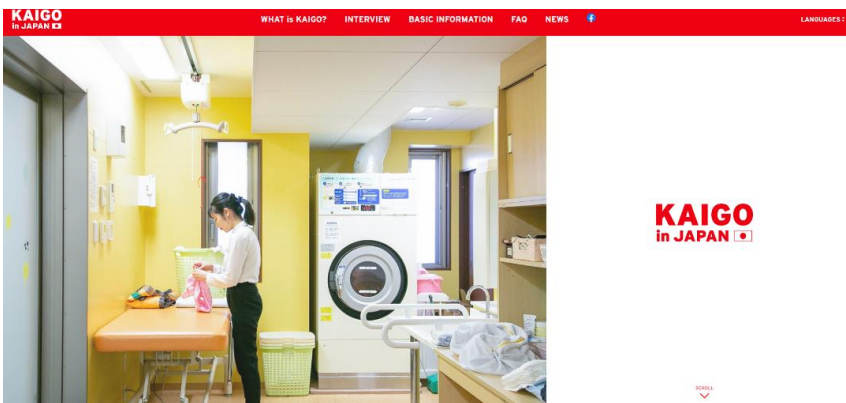
・奨学金制度、綺麗な学校設備、就職

●人材ビジネス企業の「送り出し事業」

- ・失踪しないことを約束に、奨学金が受給される
- ・無謀な教育方針
- ・難解な教科書・実行困難なカリキュラム

事業内容詳細 | webサイトの公開

- ✓ Webサイトでは、「やさしい日本語」での内容を主とし、日本語、英語を選択できる構成とした。
- ✓ 介護施設の1日がわかる動画やインタビュー記事などを掲載し、日本で働くイメージがわかりやすい工夫を行った。



(「KAIGO in JAPAN」トップページ)



(「やさしい日本語」での記載)

INTERVIEW

日本で働いている人々へのインタビューです。インタビューは、2人の会話になっています。2人の関係は、夫婦や、仕事の上輩・後輩などいろいろです。また、働いている 施設と 暮らしている 家を 見せてくれました。



2020.3.25

わからないことを教えあひながら働く

山崎優香さん (23歳) × ジンゴンローさん (27歳)

出身地
 ● 日本 × ● タイ

年齢
 ● 23歳 × ● 27歳

職業



MORE

北海道札幌市

(介護現場で働いている海外人材のインタビュー)

かいごしせつ には 介護施設の1日(3:47)



(介護施設の1日がわかる動画)

事業効果測定 | webサイト閲覧者の感想

✓ 日本で働いている／働く予定の外国人に対して、webによるアンケートを実施した。

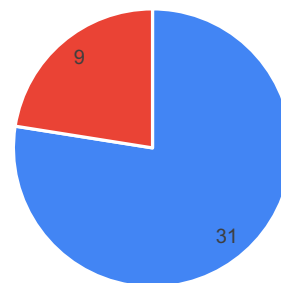
対象：①日本の介護施設で働く外国人
②日本で働く予定のアジア圏の若者
方法：webによるアンケート
期間：2020年3月30日～2020年4月20日

■ 回答者の属性 (※回答者41名のうち、1名が在留資格未回答)

勤務状況	在留資格	回答人数
日本で働いている	技能実習	13
	介護	7
	特定技能	3
	小計	23
日本で働く予定	技能実習	6
	介護	10
	特定技能	0
	小計	16
日本で働くことを検討	技能実習	0
	介護	1
	特定技能	0
	小計	1
合計		40

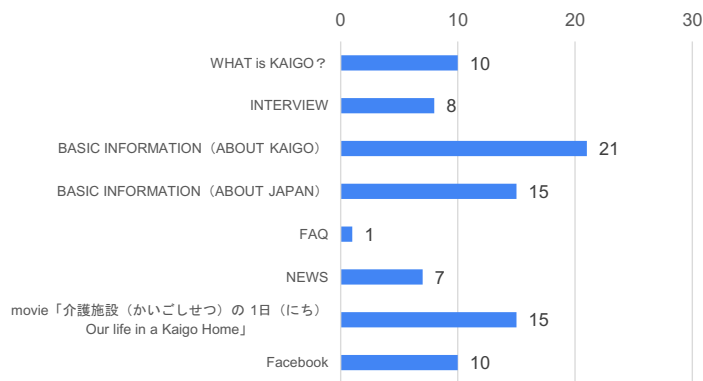
回答者の出身国

■ インドネシア ■ ベトナム



※未回答者1名

Q.参考になったコンテンツ



Q.参考になったコンテンツ(記述) ※原文のまま

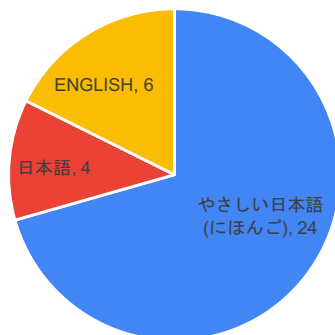
- ✓ riyoushasan no seikatsu wo sasaemasu (利用者の生活を支えること)
- ✓ YouTubeで介護のことです
- ✓ 介護の在留資格、働くまでの流れ、1か月の給料
- ✓ 介護職の大変さ、介護士として日本で就職するための必要な資格

- ✓ 参考になったコンテンツとして、介護のことについての解説が最も参考になったと答えた人が多かった。
- ✓ 自由記載欄では、介護施設の1日 (YouTube) と回答した人が多く、動画が外国人には効果的であることがうかがえる。

事業効果測定 | webサイト閲覧者の感想

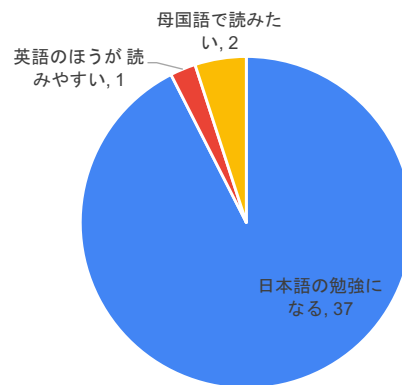
- ✓ やさしい日本語または日本語でwebサイトを閲覧している人が多く、特にやさしい日本語での表記は、日本語の勉強になるため良いと答えている人が多くいた。
- ✓ Webサイト自体もわかりやすい、との声が多い一方で、日本の文化や漢字について、難しさを感じているアジア圏の若者が多いことが読み取れた。

Q.閲覧した言語



※未回答者7名

Q.やさしい日本語での表記について



※未回答者1名

Q.もっと知りたいこと（記述）※原文のまま

- ✓ 分かりやすいと思います。私なら、このウェブサイトが好きです。どうもありがとうございました。
- ✓ 日本の文化です。
- ✓ 文法の勉強は難しいと思います。
- ✓ 漢字が書き方は難しいとおもいます、なにか いいかな、どうすれば おぼえますか
- ✓ もっと知りたいのは日本にある老人介護サービスの種類です。そして高齢者に対する実際介護経験が記載してくれば、有難いです。
- ✓ ウェブサイトに英語と日本語で書かれてありますので、それらの言語ができる人は大丈夫ですが、できない人は困ると思います。そのため、日本語と英語だけではなくより多言語サイトが作られたら、いいとおもいます。もっと知りたいのは外国人が日本で働くときの大変さです。
- ✓ 分かりにくいことはやはり漢字がたくさんあり内容が全部理解できませんでした。ベトナム語で書けばいいと思います。そうしても日本語がすべて理解できるように頑張ります。
- ✓ かんさいべんがほしいです。

事業総括と今後の課題

1. 日本の介護施設で働く外国人向けに情報を伝えるプラットフォームができた

- ✓ アジア圏の若者を受け入れている介護事業者からは、「介護」というものが正しく伝わっていないという課題意識があったため、アジア圏の若者が日本に入国する際に知ってほしい内容をまとめたwebサイトを制作し、情報基盤を構築することができた。これにより、技能実習や特定技能などの在留資格を活用して日本へ入国する外国人に対し、適切な情報提供を行うことが期待できる。

2. Webサイト制作のプロセスに、福祉とは関係のない大学生が介入することで、介護業界における人材獲得の課題を認識してもらうことができた

- ✓ Webサイト制作の情報収集として、アジア視察に出向き、現地の若者の動向や日本で働く準備を進めている施設を視察した。その視察の場に、福祉とは関係がないが現地の言語を学ぶ大学生3名に通訳として同行してもらい、介護の人材確保に関するリアルを体験していただいた。現地に行きた大学生には、帰国後に同年代の学生に対して勉強会の開催を実施してもらうことで、介護業界が抱える人材獲得の課題を認識してもらうことができた。
- ✓ この取り組みを通じて、介護というものが広く認知され、それに関心をもった若者を増やすことにつながることを期待される。

3. 継続したコンテンツの拡充と、webサイトの認知を進める必要がある

- ✓ 今年度の事業のゴールは、webサイトの制作・ローンチであったため、webサイトへのアクセスを増やす取り組みが十分に実施できていない。日本で働くことを希望する多くの外国人が認知され、入国に際して役に立つwebサイトとして確立するためには、更なるwebサイトの充実化とPRを行う必要がある。
- ✓ このwebサイトを多くの介護事業者や送り出し機関に周知することにより、日本で働くことを希望する外国人に正しく情報を伝えることを目指す。

I 若年層向け魅力発信事業について

II 各事業別の取り組み内容

- 1 非福祉系大学生向け出会い創出事業
- 2 福祉・介護BOOK制作出版事業
- 3 大学におけるマイノリティ当事者との対話型講義事業
- 4 中高生と大学生のピアエデュケーション事業
- 5 アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業

III 全体総括

令和元年度事業における情報発信の効果

- ✓ それぞれの事業を効果的に実施するために、以下の通り、情報発信を行った。
- ✓ ターゲットが具体的な事業（非福祉系大学生向け事業、大学におけるマイリティ当事者事業、中高生向けピアエデュケーション事業）については、それぞれのテーマへの広報が効果的に行われた一方で、大衆に周知させる事業（BOOK制作事業、介護情報発信web制作事業）については、更なる周知が必要といえる。

事業区分	周知イベント等	広報手段	実施効果	実施効果と考察
非福祉系大学生向け出会い創出事業	学生向けイベント「SOCIAL WORKERS TALK」	・ チラシ配布 ・ WEBサイトでの周知	<ul style="list-style-type: none"> ・ 申込数184名 ・ チケットページビュー 2,400件 ・ Twitter告知での777いいね等 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京開催では当初想定していた100名を大きく超える申し込みがあり、効果的な広報が実施できたと考ええる。 ・ 一方で、京都開催の集客が伸び悩んだことから、西日本での周知が不十分であったことが想定される。
福祉・介護BOOK制作出版事業	①雑誌「POPEYE」での特集 ②「学食で読める福祉のはなし」小冊子の制作	① SNS (twitter, Facebook, Instagram) での発信 関係者への配布 ② 大学関係者への配布による周知	<ul style="list-style-type: none"> ①記事投稿者の総フォロワー数34,952人、掲載記事のシェア数238件、関係者への配布45,615部（予定） ②関係者への配布2,072件 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 出版成果物はターゲット層と接点がある関係団体に配布できたが、ターゲットの手元に届くのは、翌年度以降となる。 ・ SNSでの周知は少なくはないものの、より多くの人に届ける工夫が必要である。
大学におけるマイリティ当事者との対話型講義事業	8大学での対話型授業	・ イベントチラシの配布 ・ 大学での掲示	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義回数51回 ・ 講義参加者延べ1,554名 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1大学あたり194名、1講義あたり30名の参加があったことから、周知が十分になされたものと考ええる。
中高生と大学生のピアエデュケーション事業	9校での中高生向け授業	特になし (中学・高校教諭への訪問による授業開催のため)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業実施数13回 ・ 1回あたり参加者数約30名 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 9校13回の実施となったが、北海道が中心であったため、北海道以外での展開を検討する。
アジア圏の若者向け介護情報発信web制作事業	Webサイト「KAIGO in JAPAN」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受け入れ事業者へのSNS、メール等での周知 ・ 送り出し機関へのSNS、メール等での周知 ・ Facebookでの発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・ webサイトPV 1,532件 ・ 動画再生回数 522件 ・ うち海外ビュー94件 (4/29時点) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ webサイトのローンチ自体が3月末のため、期間が集計期間が短い状態である。継続して増やしていくことが重要である。 ・ アジア圏ではFacebookが主な情報収集ツールとして活用されているため、アクセスを増やしていく。

令和元年度事業における福祉・介護分野への参画に対する成果

- ✓ 令和元年度の事業を通じて福祉・介護分野への参画に係る資料は以下の通り。
- ✓ 非福祉系大学生向け出会い創出事業において、2月・3月での就職フェアを実施予定であり、案内を行っていたが、Covid-19の影響により、中止となったため、就職までつなげることができなかった。
- ✓ 介護の入門的研修への参加はなかったが、実際に福祉・介護事業所への就職希望が1名あったり、職場体験・ボランティア等への参加が13件あるなど、一定の効果が見られた。

分類	件数
①福祉・介護事業所への就職希望	1件
②介護の入門的研修への参加	0件
③職場体験等への参加	14件
④就職に向けた相談事例	7件
⑤その他	8件

【主な事例】

①福祉・介護事業所への就職希望の事例

・もともと福祉に興味があった学生が関東学院大学でのマイノリティ当事者授業を受け、その興味に確信を持ち、実際に就職が決定した。

③職場体験等への参加の事例

・東京大学の当事者ゼミ参加学生が、大学を休学して社会福祉法人での長期インターンを実施予定。

・東京大学の当事者ゼミ参加学生が、ALSの方の訪問介護のアルバイトを開始。

・ピアエデュケーション事業を実施するにあたり、学生の希望により、実際に職場体験を行い、福祉職場で働くことのイメージを持っていただいた。

・松山大学の学生がマイノリティ当事者の授業を受け、その内容に興味を持ち、福祉事業所のボランティアに参加した。

④就職に向けた相談事例

・「SOCIAL WORKERS TALK」イベントに参加した学生が福祉の仕事に興味を持ったため、一般社団法人FACE to FUKUSHI社のスタッフが、同様なケースで就職された事例などを紹介し、働くイメージのすり合わせを行った。

⑤その他

・マイノリティ当事者との対話型講義事業の参加学生（8名）が福祉に興味を持っていただき、「SOCIAL WORKERS TALK」イベントに参加した。

令和元年度事業の総括

- ✓ 本事業の総括として、以下の3点が挙げられる。コンソーシアム形式での実施であり、試行錯誤しながらであったが、事業実施者の強みが最大限発揮され、社会全体に福祉・介護のしごとの魅力を発信できたと考える。

1.福祉・介護のリアルにこだわり、実践現場における仕事の価値を伝えることができた

- ✓ 福祉・介護事業者が中心となりチームが構成された若年層向けの魅力発信事業では、福祉・介護のリアルを伝えることに主眼を置き、それぞれの事業を実施した。若者層と福祉事業者をつなげることにより、福祉・介護の単なるイメージではなく、実際の現場での仕事の価値を伝えることで介護のしごとの魅力を発信することができた。

2.コンソーシアム内での連携、他の魅力発信事業実施者との連携を図ることができた

- ✓ コンソーシアム形式での実施となり、事業実施主体者間での連携が重要となる中で、定期的な検討会議や情報交換を行うことにより、効果的な連携が可能となった。具体的には、マイノリティ当事者の講義内容を福祉・介護BOOK制作事業の小冊子として構築したこと、マイノリティ当事者講義の参加者が、非福祉系大学生向け出会い創出事業に参加したこと、などが挙げられる。
- ✓ 他の魅力発信事業実施者との連携を重ね、「介護の仕事に関する世代横断的理解促進事業」の実施者である株式会社朝日新聞社、「介護事業者向け魅力発信事業」の実施主体者であるPwCコンサルティング合同会社、などとは実務的な連携を行うことができた。

3.若年層が実際に福祉・介護分野に就職する事例は依然少なく、今回の情報基盤を活用した継続的な働きかけが必要である

- ✓ 本事業の最終的なゴールは、福祉・介護分野への多様な人材の参入促進を図ることであるが、今年度の事業効果として具体的な参入までの成果に1件に留まった。一方で、若年層が福祉・介護のしごとに興味を持ってもらうための基盤整備を行うことができ、職場体験や就職相談等は増えてきている。そのため、これらの取り組みを継続し、若年層に対して福祉・介護の魅力を発信し続けることが必要である。